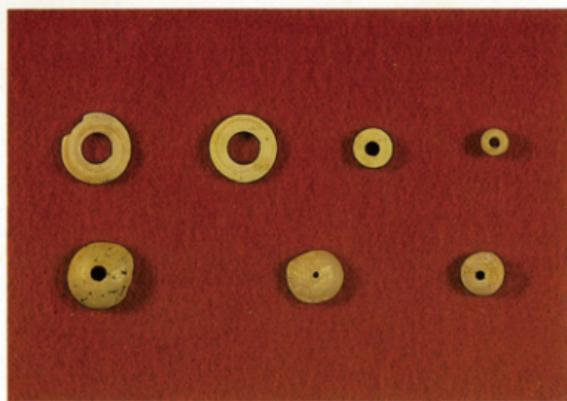


ヨヲキ洞穴



1986年3月

鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会



貝 玉



サメ歯製垂飾品・貝鏡

序 文

この埋蔵文化財発掘調査事業は、重要遺跡確認緊急調査の必要から国・県の補助を得て、県文化課の指導、協力のもとに、伊仙町が主体となって、ヨヲキ洞穴の発掘調査を実施したものです。

ここにその調査結果を「報告書」として発行いたします。この「報告書」が、文化財の保護と学術研究のために、広く関係者に活用されることを願っております。

発刊にあたって、発掘調査と本書の執筆及び編集を直接担当された牛ノ浜、井ノ上両氏をはじめ、県文化課及び発掘調査に参加された地元の方々と、文化財に対する深い御理解と御協力をいただきました関係者各位に対し、深く感謝の意を表します。

昭和61年3月

伊仙町教育委員会教育長 寛山成男

例　　言

1. 本報告書は、伊仙町教育委員会が文化庁及び鹿児島県の補助を得て、昭和60年度に実施したヨツキ洞穴の重要遺跡確認緊急調査の報告書である。
2. 調査の組織は、調査の経過の中で記した。
3. 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔絶対高である。
4. 出土遺物は通し番号としたので、挿図番号、図版番号は一致する。
5. 本書の執筆及び編集は、牛ノ浜、井ノ上が行った。
6. 出土物は、伊仙町教育委員会が保管し、伊仙町歴史民俗資料館に展示、公開している。
7. 放射性炭素測定値は京都産業大学の山田治氏に依頼し、結果はまとめの項に記載した。
8. 遺物出土状況の凡例は次のとおりである。

- 土器
- 獣骨
- 石片
- ▲ 貝
- △ 甲殻類

目 次

序 文

例 言

第1章 調査の経過.....	7
第1節 調査に至るまでの経過.....	7
第2節 調査の組織.....	7
第3節 調査の経過.....	8
第2章 位置と環境.....	9
第3章 周辺の遺跡.....	12
第4章 調査の概要.....	16
第5章 遺構・遺物.....	19
C-2区.....	19
K-4区.....	21
B-4・5区.....	24
C-8区.....	26
C-11区.....	34
D-17・18・19区.....	36
第6章 まとめ.....	37
付編 ヨヲキ洞穴出土の動物骨について 鹿児島大学農学部 松元光春.....	61

挿 図 目 次

第1図 ヨヲキ洞穴と周辺遺跡	10
第2図 本川遺跡表採土器	12
第3図 ヤナギダ古窯跡表採土器(1)	13
第4図 ヤナギダ古窯跡表採土器(2)	14
第5図 喜念貝塚表採貝札	15
第6図 ヨヲキ洞穴とヤナギダ古窯跡	16
第7図 洞穴内地形図	17
第8図 グリッド配置図と調査区	18
第9図 C-2区 遺物出土状況及び土層断面図	19
第10図 C-2区 出土土器	20
第11図 K-4区 遺物出土状況及び土層断面図	21
第12図 K-4区 遺物出土状況	22
第13図 K-4区 出土土器	23
第14図 B-4・5区 遺物出土状況及び土層断面図	24
第15図 B-4・5区 出土土器	25
第16図 C-8区 遺物出土状況及び土層断面図	26
第17図 C-8区 出土土器	30
第18図 C-8区 出土遺物	31
第19図 C-11区 遺物出土状況及び土層断面図	32
第20図 C-11区 出土土器	33
第21図 C-11区 出土遺物	34
第22図 C-11区 出土土器	34
第23図 D-17・18・19区 土層断面図	36

表 目 次

表 1 ヨヲキ洞穴と周辺遺跡	11
表 2 C-2区, K-4区出土土器一覧表	20
表 3 B-4・5区, C-8区出土土器一覧表	28
表 4 C-11区出土土器一覧表	35

図 版 目 次

図版 1 1. 洞穴遠景 2. 洞穴近景	39
図版 2 1. 調査風景 2. 調査風景	40
図版 3 1. K-4区断面 2. B-4・5区断面	41
図版 4 1. C-8区断面 2. C-11区断面	42
図版 5 1. C-11区断面 2. D-17・18・19区断面	43
図版 6 1. C-2区遺物出土状況 2. №33出土状況	44
図版 7 1. №30出土状況 2. K-4区遺物出土状況	45
図版 8 1. B-4・5区 2. C-8区遺物出土状況	46
図版 9 1. 2. C-11区遺物出土状況	47
図版10 1. C-2区出土土器 2. 同裏	48
図版11 1. K-4区, B-4・5区出土土器 2. 同裏	49
図版12 1. K-4区出土土器(34) 2. K-4区, B-4・5区出土土器(33-39)	50
図版13 1. C-8区出土土器 2. 同裏	51
図版14 1. C-8区出土土器 2. 同裏	52
図版15 1. C-8区出土土器 2. 同裏	53
図版16 1. C-11区出土土器 2. 同裏	54
図版17 1. C-11区出土土器 2. 同裏	55
図版18 1. C-8区, C-11区出土遺物	56
図版19 1. ヤナギダ古窯跡 2. ヤナギダ古窯跡	57
図版20 1. ヤナギダ古窯跡採集土器 2. 同裏	58
図版21 1. ヤナギダ古窯跡採集土器 2. 同裏	59
図版22 1. 本川遺跡, 喜念貝塚採集遺物	60

表 目 次

表 1	ヨヲキ洞穴と周辺遺跡.....	11
表 2	C—2区, K—4区出土土器一覧表.....	20
表 3	B—4・5区, C—8区出土土器一覧表.....	28
表 4	C—11区出土土器一覧表.....	35

図 版 目 次

図版 1	1. 洞穴遠景 2. 洞穴近景.....	39
図版 2	1. 調査風景 2. 調査風景.....	40
図版 3	1. K—4区断面 2. B—4・5区断面.....	41
図版 4	1. C—8区断面 2. C—11区断面.....	42
図版 5	1. C—11区断面 2. D—17・18・19区断面.....	43
図版 6	1. C—2区遺物出土状況 2. No33出土状況.....	44
図版 7	1. No30出土状況 2. K—4区遺物出土状況.....	45
図版 8	1. B—4・5区 2. C—8区遺物出土状況.....	46
図版 9	1. 2. C—11区遺物出土状況.....	47
図版10	1. C—2区出土土器 2. 同裏.....	48
図版11	1. K—4区, B—4・5区出土土器 2. 同裏.....	49
図版12	1. K—4区出土土器(34) 2. K—4区, B—4・5区出土土器(33・39).....	50
図版13	1. C—8区出土土器 2. 同裏.....	51
図版14	1. C—8区出土土器 2. 同裏.....	52
図版15	1. C—8区出土土器 2. 同裏.....	53
図版16	1. C—11区出土土器 2. 同裏.....	54
図版17	1. C—11区出土土器 2. 同裏.....	55
図版18	1. C—8区, C—11区出土遺物.....	56
図版19	1. ヤナギダ古窯跡 2. ヤナギダ古窯跡.....	57
図版20	1. ヤナギダ古窯跡採集土器 2. 同裏.....	58
図版21	1. ヤナギダ古窯跡採集土器 2. 同裏.....	59
図版22	1. 本川遺跡, 喜念貝塚採集遺物.....	60

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

ヨヲキ洞穴は、昭和59年3月11日、カムイヤキ古窯跡周辺の分布調査を行っていた義憲和氏によって発見された洞穴遺跡である。¹⁾

現在、奄美地方では砂丘地等の海岸部での調査は徐々にすすめられつつあるが、内陸部での遺跡の発見は少く、また調査例も少い。

このような経過の中で、ヨヲキ洞穴の取り扱いについて、遺跡の概要を把握するために確認調査をしたらとの意向がでてきた。

伊仙町教育委員会は、県文化課の指導もあって、洞穴遺跡の稀少さもふまえ確認調査を計画し、昭和60年度の国、県の補助事業として、実施した。

調査期間は、昭和60年5月27日より6月19日まで行い、その後の遺物の整理作業と報告書の作成は、県文化課に依頼した。

第2節 調査の組織

調査主体者 伊仙町教育委員会

調査責任者	伊仙町教育委員会	教 育 長	寛山 成男
		社会教育課長	米田 博重
		社会教育主事	尾辻 輝男
		主 事	重田 吉明
		タ	中村 勝憲
		タ	吉田 福秀
		タ	永久 圭司
		タ	徳山 幸助

伊仙町立歴史民俗資料館 館長

義山 正市

調査担当者 鹿児島県教育委員会文化課 主事

牛ノ浜 修

タ タ

井ノ上秀文

調査指導者 鹿児島県考古学会会長

河口 貞徳

なお、調査、企画において、県教育委員会文化課長 桑原一廣、同課長補佐 坂口肇、同主幹中村文夫、同主任文化財研究員 向山勝貞の各氏のほか、同管理係の指導、助言を得た。調査中は、町文化財保護審議会委員 義憲和氏、徳之島高等学校教諭 成尾英仁氏、地元の四本延宏氏の協力、教示を得た。

第3節 調査の経過

発掘調査は、昭和60年5月27日から同年6月19日まで実施し、出土遺物の整理作業を同年7月まで実施した。発掘調査の経過は以下日誌抄で略述する。

5月27日（月） 13:00 徳之島空港着、教育委員会へ。現地にて調査個所検討。

用具点検。

5月28日（火） 発掘調査開始。洞穴周辺伐採、草刈り。道具運搬。午後トレンチ設定。C-2区、B-4・5区、C-8区調査。

5月29日（水） C-2区 陶質土器、B-4・5区 犬田布式土器 C-8区
嘉徳I、II式、面縄東洞式土器。D-17・18・19区 トレンチ設定。

5月30日（木） C-2区 陶質土器の周辺に焼土あり。B-4・5区 北側半分に集石。

5月31日（金） B-4・5区 下位は礫層である。C-8区 廃土を水洗。サメ歯装飾品。D-17・18・19区 埋土である。

6月1日（土） B-4・5区 C-8区、D-17・18・19区調査。C-11区設定調査。

6月3日（月） B-4・5区、C-8区調査。C-11区 弥生相当土器、貝輸出土。

6月4日（火） B-4・5区 断面実測後埋め戻し。D-17・18・19区 断面実測。

6月5日（水） C-11区 2層中より貝巣出土。K-4区 トレンチ設定後調査。
陶質土器出土。D-17・18・19区 埋め戻し。

6月6日（木） K-4区、C-11区調査。D-17、18、19区埋め戻し

6月7日（金） C-8区、C-11区、K-4区 調査。D-17・18・19区 埋め戻し。

6月10日（月） レベル原点移動。洞穴内原点 海抜 155.04m。

6月11日（火） C-11区、K-4区、洞穴内測量。

6月12日（水） C-2区、C-11区、洞穴内測量。河口先生指導（14日まで。）

6月13日（木） C-2区、C-11区、洞穴内断面測量。ヤナギダにて窓跡発見。

6月14日（金） C-11区、B-4・5区、K-4区 C-8区、断面実測。

6月15日（土） C-11区、K-4区、C-8区、埋め戻し。窓跡周辺清掃。

6月17日（月） C-11区 壁面断面実測。

6月18日（火） C-8区、C-11区、埋め戻し。ヨヲキ洞穴周辺地形図作成。

6月19日（水） ヨヲキ洞穴周辺地形測量。全調査終了。

6月17日より収蔵庫にて整理作業。

第2章 位置と環境

ヨヲキ洞穴は、鹿児島県大島郡伊仙町阿三ヨヲキに所在する。伊仙町の水源地である尺八池より流れ出た水は、石灰岩の岩肌を浸食し、通称イキントゥと呼ばれる台地の森へと流れて行く。尺八池より流れ出た水が最初の暗川となる洞穴が、今回調査したヨヲキ洞穴である。

徳之島の地形は、高さ 200m 付近を境として、山地と隆起珊瑚礁に大別される。この山地を取巻くように、海岸に向ってゆるやかに傾斜した段丘が広がり、島の東南から南西部にかけての南部海岸に隆起珊瑚礁が発達して、広大な海岸段丘を形成している。海岸線は天城町の南部から伊仙町にかけて、島の西岸がほとんど20~100m 程の断崖で海に落ち込んでいるのに対し、島の東岸はほとんど全面になだらかな隆起珊瑚礁が発達している。

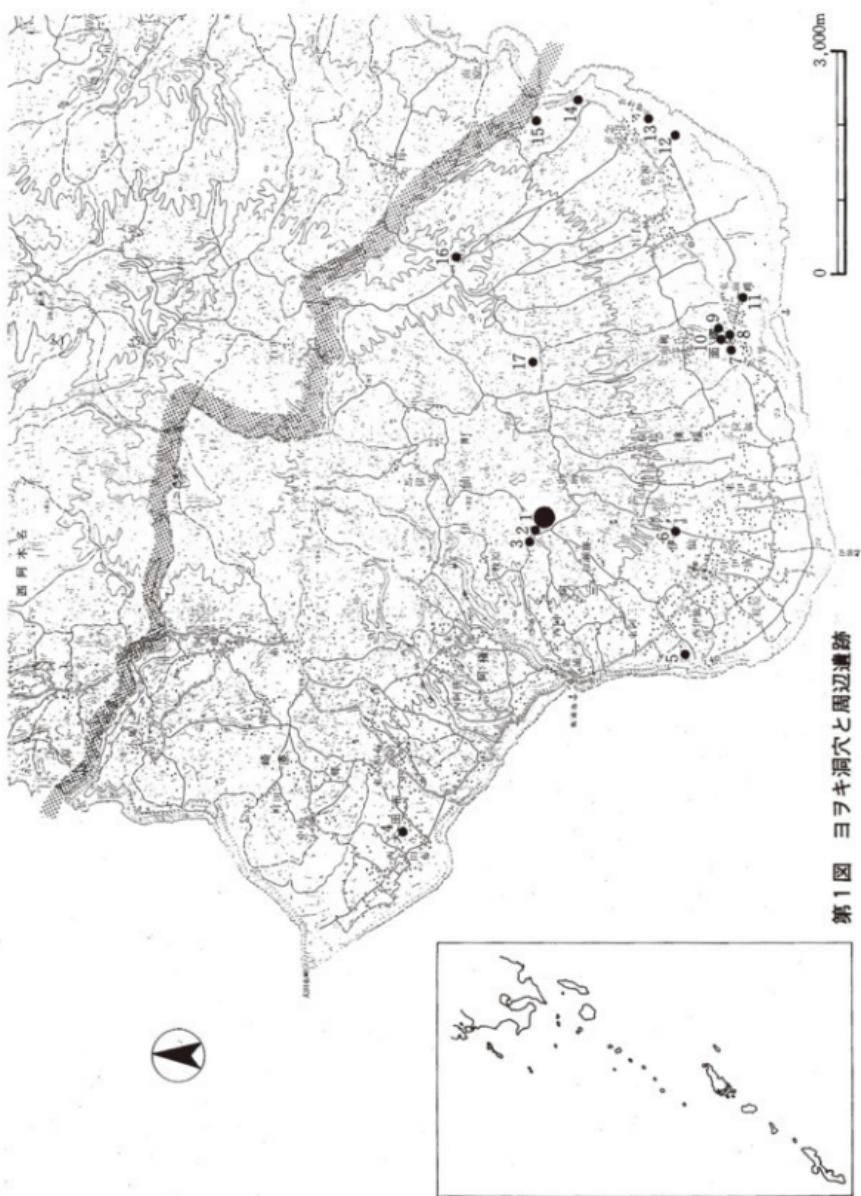
遺跡の所在する伊仙町は、徳之島の南に位置し、徳之島町と天城町と境を接している。

伊仙町は奄美群島の中でも遺跡の多い所であり、1928年面縄貝塚の発見以来、地元の研究者をはじめ、県内外の研究者や行政関係者によって学術調査や重要遺跡確認調査が実施され、貴重な資料や報告がなされている。

伊仙町は貝塚の多いところで知られている。宇宿上層式、喜念 I 式、嘉徳式土器貝札の出土した喜念貝塚、弥生時代相当期の土器、石器の採集されている佐弁貝塚、面縄西洞式、犬田布式、喜念 I 式土器と多くの貝製品が出土し、鹿角もみられた犬田布貝塚、南西諸島土器形式の標式遺跡となっている面縄貝塚があげられる。面縄貝塚は 1~4 貝塚まであり、各々様相の異なる貝塚群である。第 1 貝塚は爪形文、市来式土器、貝輪が出土し、洞穴内からは弥生時代の箱式石棺墓が検出されている。第 3 貝塚は兼久式土器、第 4 貝塚は、面縄前庭式、面縄東洞式、面縄西洞式土器の標式遺跡である。貝塚以外では、貝輪や人骨が検出された喜念原始墓、また近年、岩陰や砂丘地以外でも遺跡の発見がみられ、標高 235m の喜念上泉袋には、宇宿上層式土器と石斧が採集された喜念上原遺跡、陶・磁器を多く出土するミンツキ集落跡、完形の青磁碗 12 点が出土した面縄按司城（通称ウガンウスジ）などが知られている。また最近、南西諸島のナゾのひとつとされていた陶質土器の窯跡が地元の研究者によって発見され、カムイヤキ古窯跡として注目をあびている。

このように伊仙町の南海岸は土器形式等奄美地方の考古学研究の基礎となっているところである。

第1図 ヨヲキ洞穴と周辺遺跡



第1表 ヨヲキ洞穴と周辺遺跡

番号	遺跡名	所在地	備考	文献
1	ヨヲキ洞穴	伊仙町阿三ヨヲキ		本文
2	ヤナギダ古窯跡	伊仙町阿三ヤナギダ	古窯跡(陶質土器)	本文
3	カムイヤキ古窯跡	伊仙町阿三亀焼	古窯跡(陶質土器)	①②
4	犬田布貝塚	伊仙町犬田布連木竿	面縄西洞式、犬田布式、貝器、鹿角	③
5	瀬田浜遺跡	伊仙町	貝輪(オオツタノハ)	④
6	ミンツキ集落跡	伊仙町伊仙	陶器、磁器、陶質土器、石斧	⑤
7	面縄第1貝塚	伊仙町面縄	箱式石棺、貝輪、市来式、兼久式	⑥⑦
8	面縄第2貝塚	伊仙町面縄	住居跡、嘉徳I・II式、貝器	⑦⑧
9	面縄第3貝塚	伊仙町面縄	嘉徳II式、兼久式、石皿、磨石	⑦⑨
10	面縄第4貝塚	伊仙町面縄	春日式、面縄前庭式、面縄東洞式、面縄西洞式	⑦⑩
11	面縄東浜貝塚	伊仙町面縄	土器、貝製品	⑦
12	佐弁貝塚	伊仙町佐弁東ミヤド	兼久式、弥生相当土器	⑪
13	喜念貝塚	伊仙町喜念兼久	嘉徳I式、宇宿上層式、喜念I式、貝札	⑫
14	喜念原始墓	伊仙町喜念兼久	喜念I式、宇宿上層式、貝輪、人骨	⑬
15	本川遺跡			本文
16	喜念上原遺跡	伊仙町喜念上泉袋	宇宿上層式、石斧、磨石	⑤
17	面縄按司城	伊仙町上面縄	青磁完形塊	④

<文献>

- ① 新東晃一、青崎和憲「カムイヤキ古窯跡群I」 伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 1985
 ② 新東晃一、青崎和憲「カムイヤキ古窯跡群II」 伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 1985
 ③ 吉永正史、宮田栄二「犬田布貝塚」 伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 1984
 ④ 伊仙町歴史民俗資料館展示
 ⑤ 義憲和「伊仙町の歴史」「伊仙町誌」 1978
 ⑥ 山崎五十磨「鹿児島県大島郡德之島貝塚に就いて」 考古学雑誌第20巻10号 1930
 ⑦ 吉永正史、牛ノ浜修他「面縄貝塚群」 伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 1985
 ⑧ 三友国五郎、国分直一「徳之島面縄貝塚調査報告 面縄第2貝塚と付近の貝塚」 古代学第8巻2号 1959
 ⑨ 河口貞徳「南島先史時代」 鹿児島大学南方産業科学研究所報告第1巻2号 1956
 ⑩ 九学会連合「徳之島面縄第四貝塚調査報告」「奄美その自然と文化」 1959
 ⑪ 白木原和美、義憲和「大島郡伊仙町の先史学的所見」 南日本文化第9号 1976
 ⑫ 三宅宗悦、藤岡謙次郎「徳之島出土の貝塚土器に就いて」 考古学雑誌第11巻5号 1940
 ⑬ 三宅宗悦「大隅國德之島喜念原始墓出土貝製品及び出土人骨の抜粋に就いて」

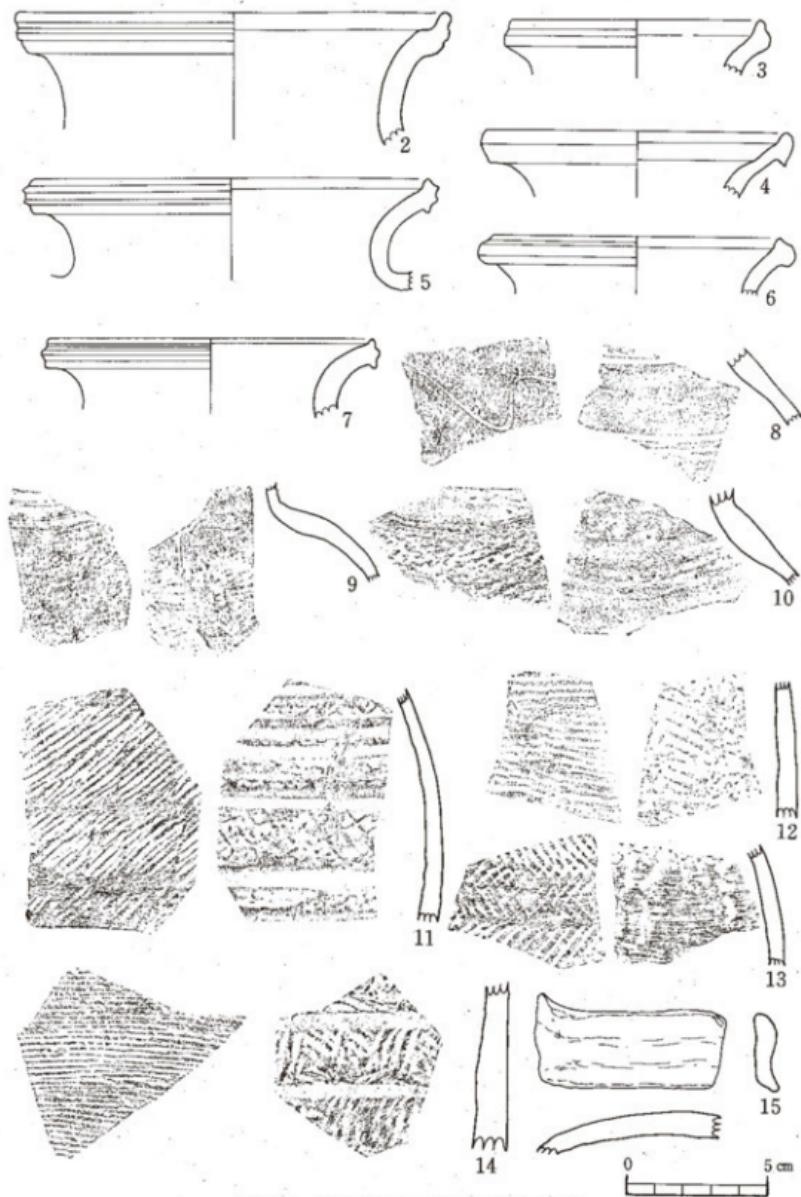
第3章 周辺の遺跡

本川遺跡

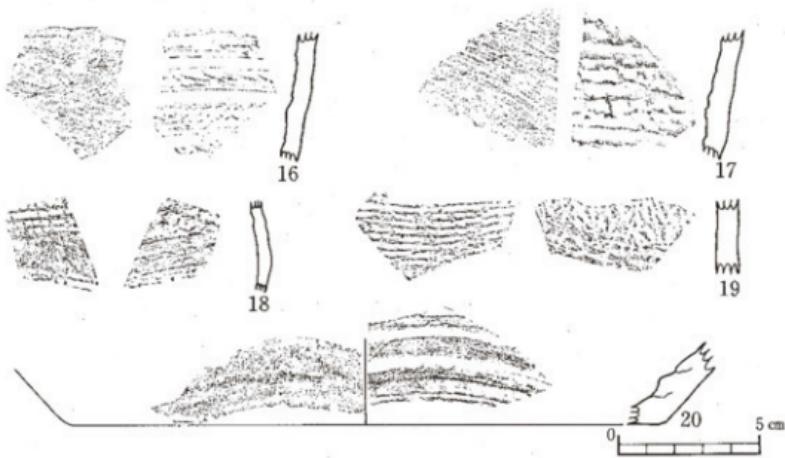
本川遺跡は伊仙町と徳之島町の境を流れる本川の川口近く、標高約50mの東向の台地の先端部に位置する。第2図1の土器は当遺跡の表採資料である。器形は乳房状の底部からゆるやかにふくらむ胴部となり、口縁部は大きく外反する。口唇部は刺突連点文を施す。口縁から底部にかけて内外面とも条痕文がみられるが、胴部は磨滅のためはっきりしない。胴部上位には棒状のものにより3条の連点文を斜位に施すが、一部施文しないものの数箇所の山形をなすと考えられる。胎土は石英、長石を含み、色調は暗赤褐色を呈し、焼成はややもろい。



第2図 本川遺跡表採土器



第3図 ヤナギダ古窯跡表採土器(1)



第4図 ヤナギダ古窯跡表採土器(2)

ヤナギダ古窯跡

古窯跡の発見は、今回の調査終了間際、洞穴入口で拾った1片の陶質土器であった。(この陶質土器の名称については、以前より、白木原和美氏や佐藤伸二氏等により論議がなされてきているところであるが、今回は陶質土器で統一していきたいと思う。)

洞穴入口の約300m北側には、南西諸島最初の古窯跡の発見となったカミイヤキ古窯跡がありこの地域一帯は、窯跡の可能性のあるところであった。

陶質土器の流れてきたであろうと思われる畠の地主さんに聞いたところ、洞穴北側の森の近くにいっぱい落ちているとのことであった。早速、周辺の確認を行ったところ、六ヶ所の灰原と一ヶ所の焼土らしきものが発見された。

2~7は壺の口縁部である。いずれも口唇部内側直下に段を有するものである。2・5・7は外側口唇部直下に段を有し凹線となっている。4には、口唇部直下に粘土の引き出しによる垂れ下りが施されている。色調は青灰色を呈し、胎土には石英、石灰粒を含んでいる。8~10も壺である。8にはヘラ描き波状文が施されている。9の内面には、平行タタキ痕の上に扁状のあて具痕が残っている。やはり色調は青灰色で胎土に石英、石灰粒を含んでいる。11~14は外面に斜状の平行タタキ痕がみられ、内面には格子目文のタタキ痕がみられる。

15は、把手部分である。カミイヤキ古窯跡では大形の胴部中央の2ヶ所に対し着くことが知られている。把手は、胴部中央部のゆるやかな球形部に横位に付けられる。把手の取り付け部分の胴部壁は、内側に球形にくぼめられている。そのため横

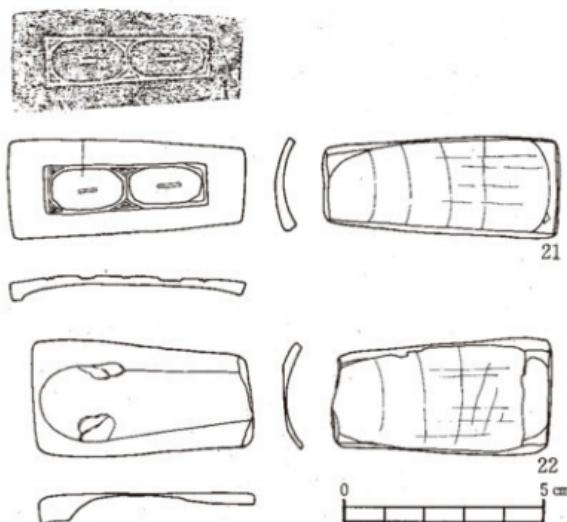
位の把手部分は、胴部壁の輪郭線の範囲内にある。把手は長さ 6.5cm、幅 3cm、厚さ 1cmで断面は縦長の長方形になり中央部がわずかにくぼむ。20は壺の底部と思われる。内面には粘土接合面がみられる。

このように、ヤナギダ古窯跡の表採遺物は、カムイヤキ古窯跡と同様の遺物が多く、この一帯は陶質土器的一大生産基地であったと考えられる。

- 1) 日木原和美「類須恵器集成」 南日校文化第 6 号 1973
- 2) 佐藤伸二「南島の須恵器」 東洋文化第 48・49 号 1970
- 3) 新東晃一・青崎和憲「カムイヤキ古窯跡群 I・II」 伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)(5) 1985

喜念貝塚表採貝札

21・22とも喜念貝塚出土の貝札である。地主の折田三郎氏が砂丘北側の畑で採集されていたものである。21は長さ 5.9cm、最大幅 2.5cm、重さ 8.05g を測る。22は長さ 5.4cm、最大幅 2.9cm、重さ 11.8g を測る。22には黒斑がみられ、アンボンクロザメガイと思われる。体層を切り取り、ていねいな研磨によって造りあげられている。表面の研磨によって厚味は 0.1mm内外となっている。



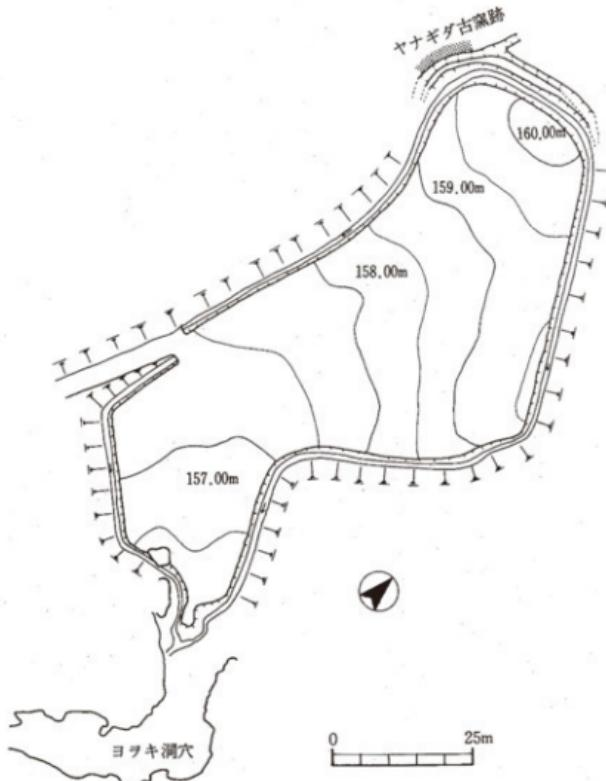
第5図 喜念貝塚表採貝札

第4章 調査の概要

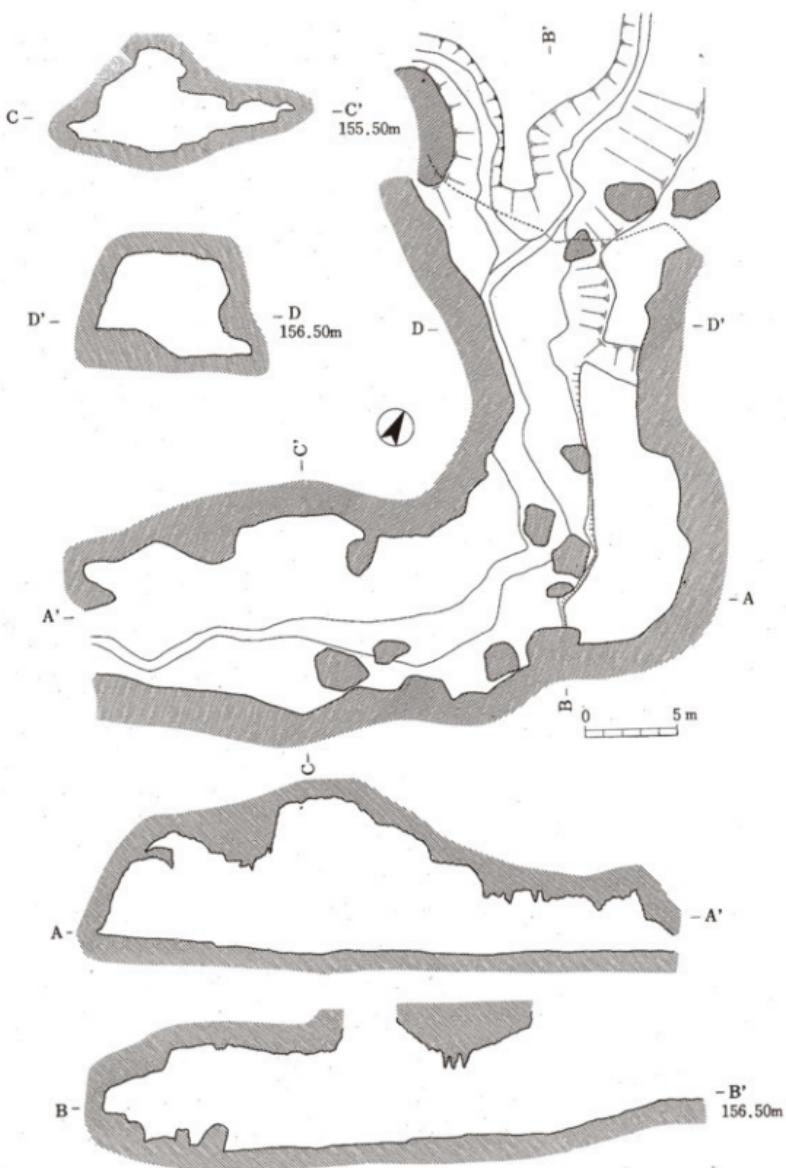
ヨヲキ洞穴は、伊仙町阿三のイキントウと通称される台地の森にある。伊仙町の水源地である尺八池の南側にあり、北西に開口する洞穴遺跡である。昭和59年3月発見されている。

今回は確認調査のため、洞穴内部と前庭部全体にグリッドを設け、2m間隔で区割を行い、洞穴奥より1・2・3……区、洞穴東よりA・B・C……区と呼称し、洞穴内部の保存状況のよさうなところに任意のトレンチを設定した。

調査の結果、縄文・弥生時代相当期の遺物、陶質土器の生活跡等が確認された。縄文時代の遺物としては、条痕文、面繩東洞式、嘉徳I・II式土器が出土した。

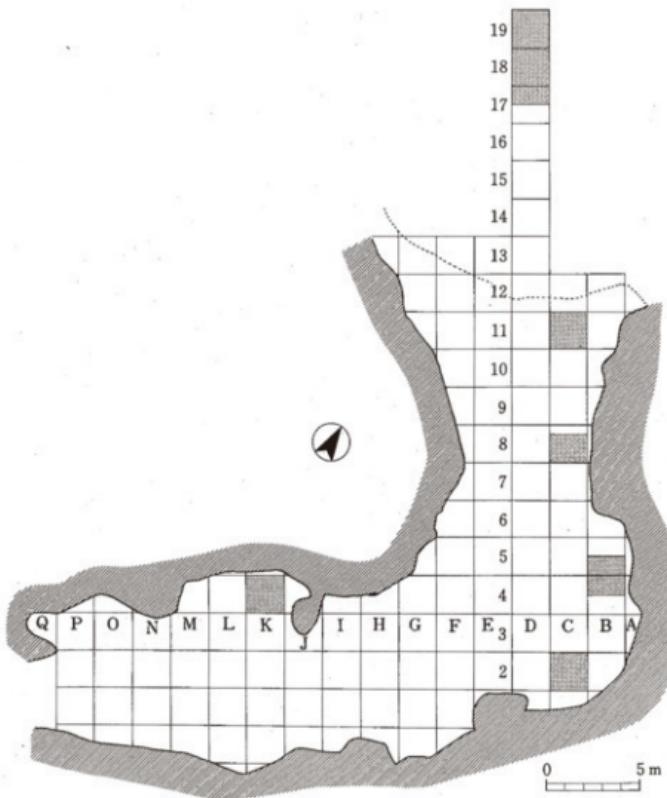


第6図 ヨヲキ洞穴とヤナギダ古窯跡



第7図 洞穴内地形図

洞穴は、琉球石灰岩が溶食によってできた錐乳洞であり、岩盤は輝石安山岩である。尺八池から流れでた雨水や地下水が伏流して暗川となり、洞穴内を流れている。ヨヲキとは方言で「ヨヲ」（横穴）、「フキ」（堅穴）のことであり洞穴を表す言葉である。北西に開口する洞穴は約22mの所でほぼ垂直に南西へ進み、約30mの所で幅、高さとも約1mの出口となる。洞穴の大きさは入口が幅約12m、高さ約6mで最も幅の広い所が約12m、狭い所が約6mである。高さは最も高い所が8m、低い所が3mである。洞穴内部は数ヶ所に落盤がみられるが、中でも中ほどに2ヶ所天井部分が落ちて外光のさし込み所があり、天然の明り窓となっている。



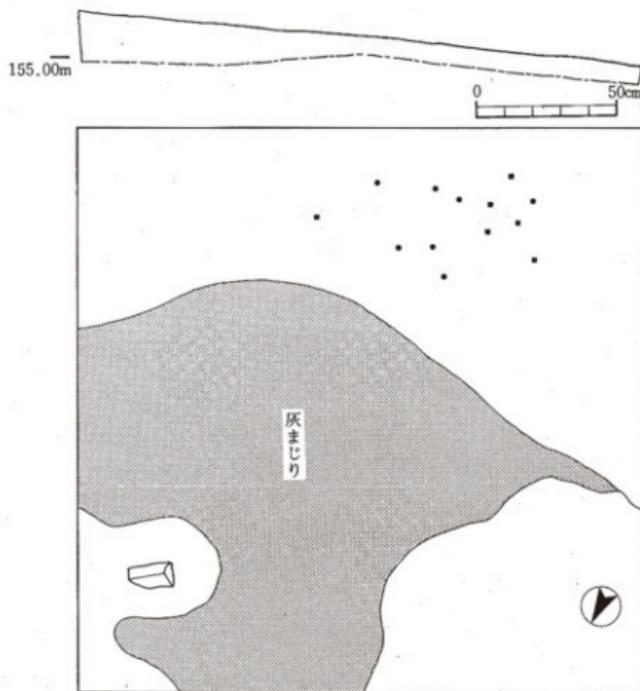
第8図 グリッド配置図と調査区

第5章 遺構・遺物

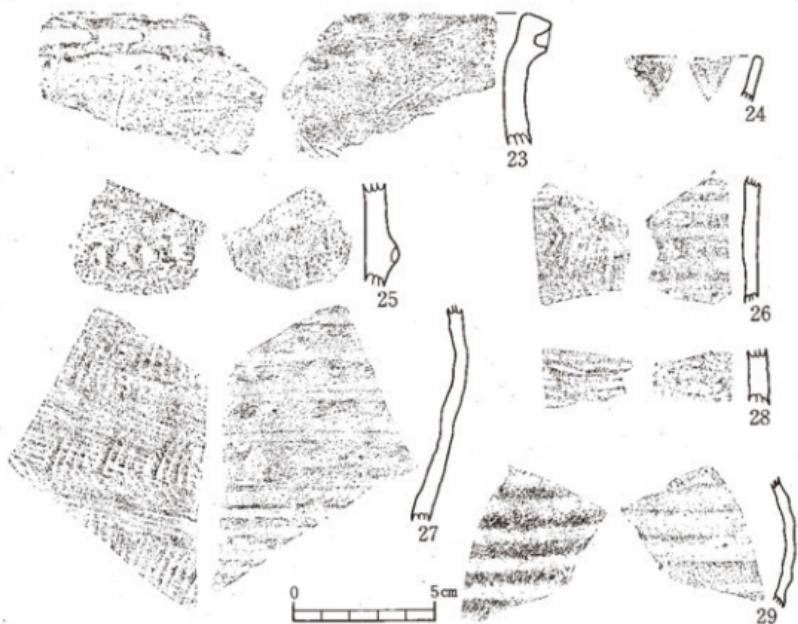
C-2区

洞穴奥部に2m×2mのトレンチを設定した。表層を10~20cm掘り下げた時点で北東部に灰混りの焼土を検出した。地元の人々の話によると戦前この洞穴内で鍛冶屋が住んでいて、洞穴の岩のテラス部には今でも鉄片が残っている。焼土部以外の南部に遺物の検出がみられた。これは表層の遺物のため新旧混入している。

23は、肥厚した口縁部をもち、肥厚部に一条の横捺刻文が深く刻まれている。焼成は良く、胎土に金雲母を多くみられる。24は薄手の土器で表面はよくヘラナデによって精製されている。25は、一条の突帯に刺突を加えたものでやはり金雲母を多く含む。26~28は陶質土器である。26はタタキの重複痕が若干であるがみられる。



第9図 C-2区 遺物出土状況及び土層断面図



第10図 C-2区 出土土器

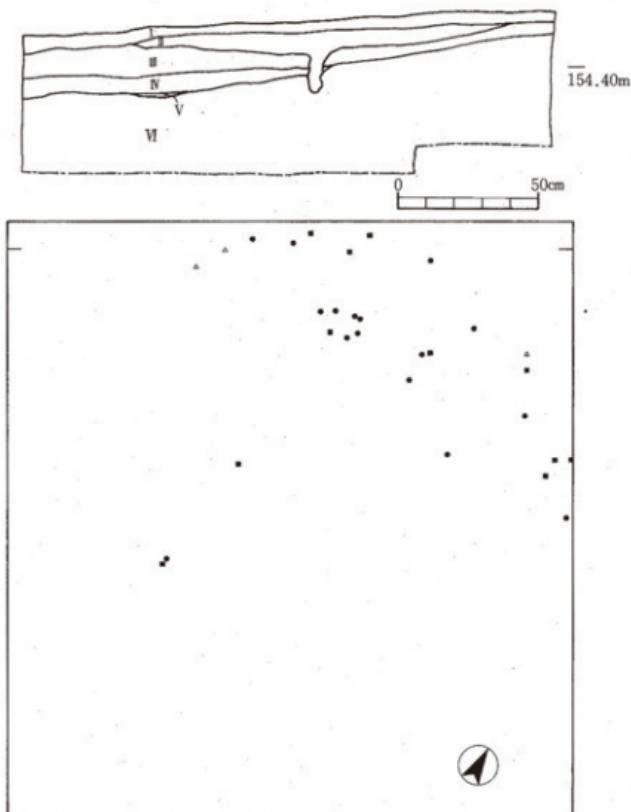
内面にはナデ整形がみられる。27は綾杉文のタタキ痕と平行タタキ痕が交互になされていて内面にはナデ整形痕がみられる。28は平行タタキ痕である。29は近代の陶器と思われる。

第2表 C-2区 K-4区出土土器一覧表

番号	出土区	層位	胎	土	焼成	色調	備考
10 23	C-2	I	石英, 雲母, 石灰粒		良好	褐色	
タ 24	タ	II	石英, 石灰粒		良好	赤褐色	
タ 25	タ	II	石英, 雲母		普通	黄褐色	
タ 26	タ	II	石英, 石灰粒		良好	青灰色	
タ 27	タ	II	石英, 石灰粒		良好	青灰色	
タ 28	タ	I	石灰粒		やや軟	青灰色	
タ 29	タ	I	石灰粒, 細礫		良好	淡褐色	
13 30	K-4	VI	石英, 長石		良好	暗茶褐色	
タ 31	タ	VI	石英, 石灰粒		良好	暗赤褐色	
タ 32	タ	VI	石英, 石灰粒		良好	褐色	
タ 33	タ	IV	石英, 石灰粒		良好	褐色	
タ 34	タ	II・III	石灰粒		良好	青灰色	

K-4区

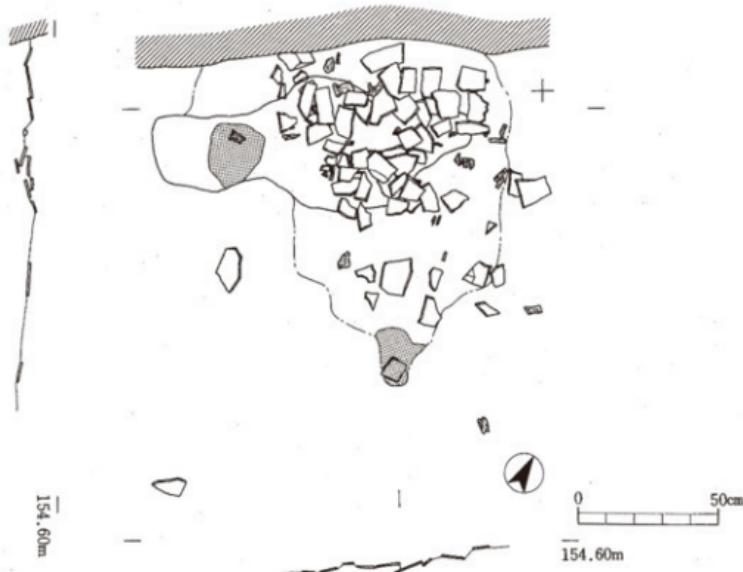
K-4区は直角に屈折した北西壁面の張り出し部に位置し、洞穴内では比較的高所である。第12図は第13図34の土器の出土状況である。II層の淡黒褐色土層からIII層の淡黄褐色土層にかけて割れた破片を敷きつめたような状態で出土した。そしてその上で火をたいた状態を想像させるように上になっている土器の面にはススや木炭片が付着している。周辺には土器片に混って獸骨片も出土している。



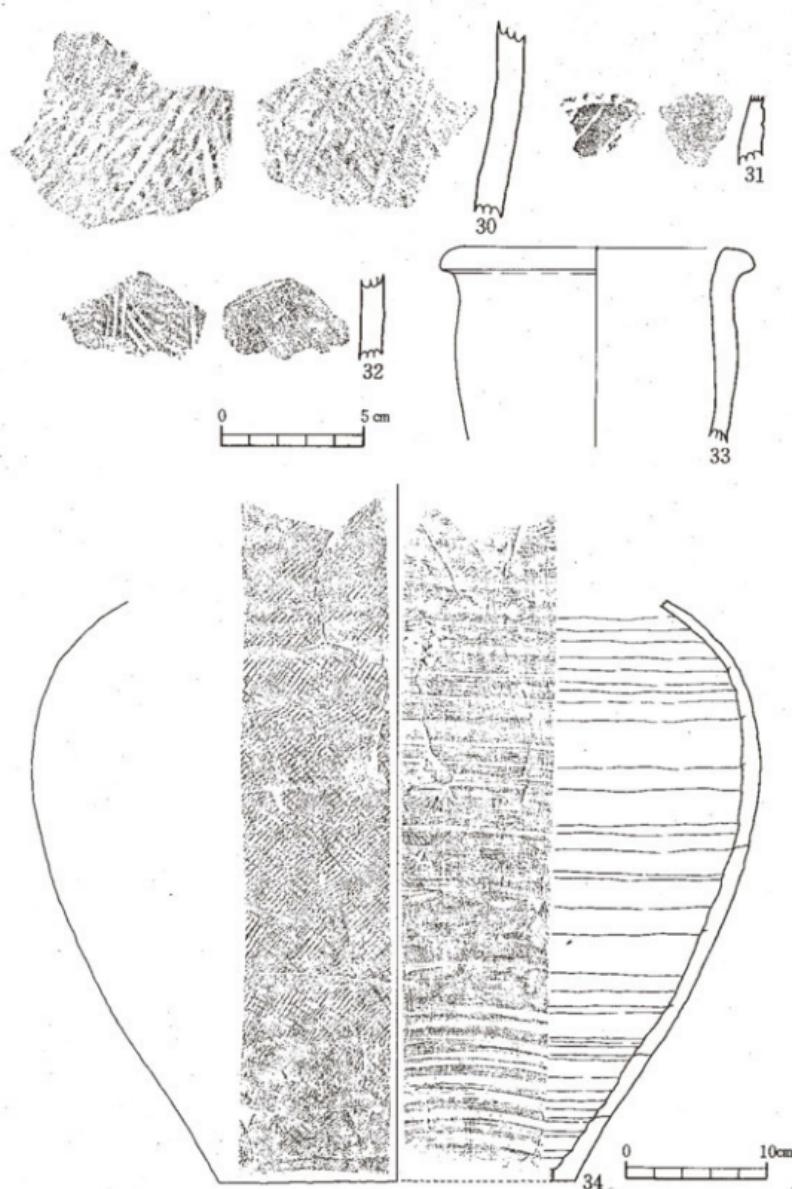
第11図 K-4区遺物出土状況及び土層断面図

I 黄褐色土	II 淡黒褐色土	III 淡黄褐色土
IV 灰色がかった褐色土	V 明黄褐色土	VI 褐色土

第13図30は内外面ともにあらい条痕を施す土器の胴部である。胎土に石英、長石を含み、焼成は良好である。色調は内外面ともに暗茶褐色を呈している。31はヘラ状のもので斜位に沈線文を施すものの胴部である。胎土に砂粒を含み、焼成は良い。色調は暗赤褐色を呈している。32は内外面ともに条痕を施すものの胴部であるが、外面は内面の条痕に比較してややあらい。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。いずれもVI層から出土したものである。33は胴部がわずかにふくらみ、口縁部は肥厚して外反し、口唇部がほぼ平坦となる無文の土器である。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。34は陶質土器の甕で底部から肩部にかけてほぼ半分残っていたものである。器形は胴部から肩部にかけ大きくふくらみ、底部は平底になるとされるものである。外面は全面に格子目タタキを施し、底部はタタキ後ナデ仕上げをおこなっている。内面は放斜状に広がる扇形で端がやや丸みをおびるタタキを施した後、ややあらいナデ仕上げをおこなっている。



第12図 K-4区遺物出土状況

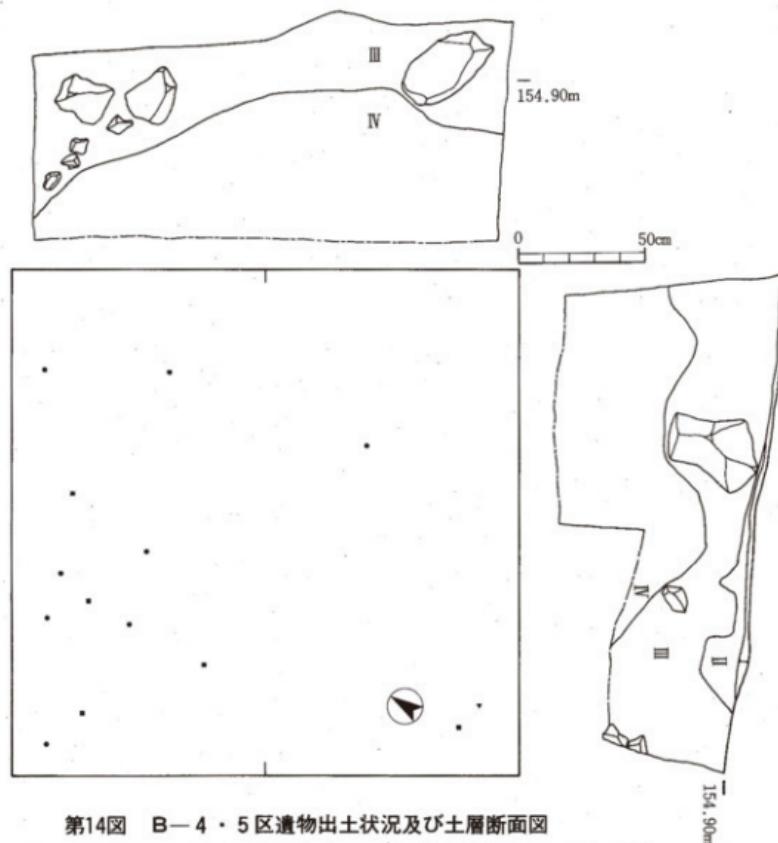


第13図 K-4区出土土器

B-4・5区

洞穴のほぼ中央東側に2m×2mのトレンチを設定した。層位はI層(明褐色土) II層(明茶褐色土), III層(淡灰褐色土), 岩盤となり, 東から西に傾斜している。35~39はIII層からIII層下部から出土している。III層は礫が多かったが, 輝緑安山岩の岩盤まで確認を行った。

35は, 外反する口縁をもつ土器で, 口唇部付近にクシ状の施文具で7~9条の沈線を施している。その下位にヘラ状施文具によって深く切り込みを入れ, 頸部から胴部にかけては, 口縁部と同様の施文を縦位に施している。36もクシ状施文具を



第14図 B-4・5区遺物出土状況及び土層断面図

I 明褐色土 II 明茶褐色土 III 淡灰褐色土 IV 岩盤

用いたもので、胎土、色調より35と同一物体と思われる。38は平坦な口唇部をもつ口縁で金雲母を多く含んでいる。口唇部は肥厚していて口唇部下 3.4 mmの箇所に、幅 7 mm、厚さ 2 mm の半円状の断面を呈す突帯が施され、突帯の上下両縁には叉状施文具で刺突を施している。40は表裏とも条痕のみられる土器で、B-4・5区の最下層から出土している。

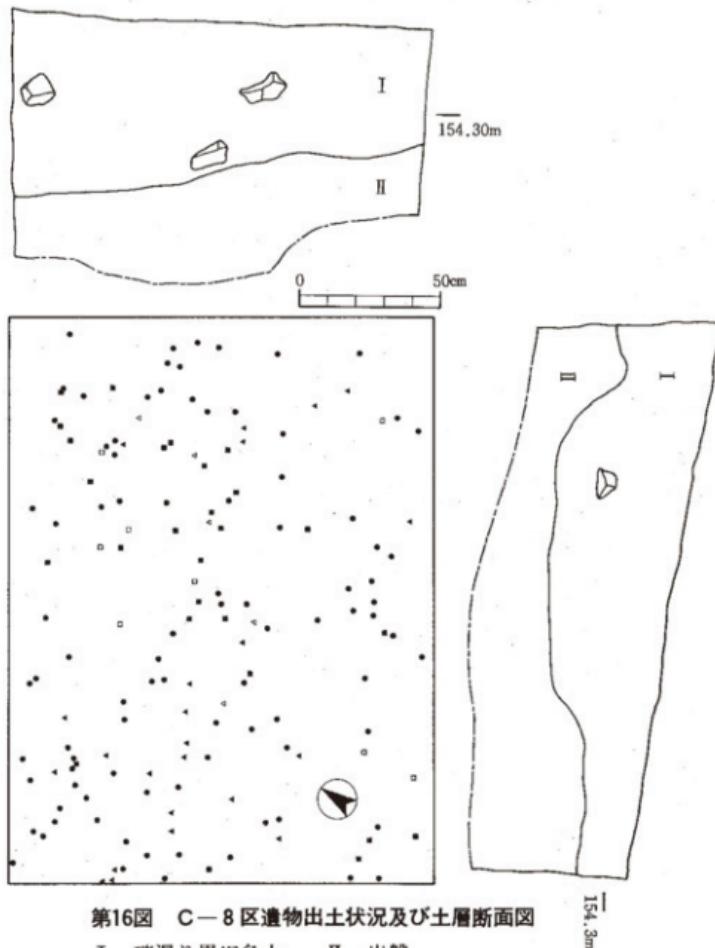


第15図 B-4・5区出土土器

C-8区

C-8区は洞穴の幅が入口からしだいに狭くなり、その最も狭くなる部分で幅が約6m余りの北東壁面に接する部分である。

第17図41はヘラ状のものにより、羽状に押圧する文様を縦位に施すものである。42は内外面ともにわずかに条痕がみられる。いずれも胎土に雲母を混入している。43・44は内外面ともにややあらい条痕を施文するもので、44は胎土に細礫の混入が



第16図 C-8区遺物出土状況及び土層断面図

I 磕混り黒褐色土 II 岩盤

みられる。45は外反する口縁部の破片である。口縁端部の外面には細かい粘土紐をはりつけ、刻目を施している。この突帯の下位にはヘラ状のものにより斜位の沈線文を施している。内面には横位の細かい条痕がみられる。胎土に石英、雲母を含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。46～50はヘラ状のもので数ミリの間隔をもって沈線を施文するものである。内面にはいずれも細かい条痕文が観察される。51は尖底もしくは丸底になると考えられる底部の破片で、内外面ともに条痕を施すものである。胎土に石英、石灰粒、雲母を含んでいる。52は口縁部が外反するもので、口縁部はわずかに肥厚しており、この肥厚部分が文様帶となっている。文様は先端が三角形状となるもので押し引き文を施している。胎土に石英と多量の雲母を含んでいる。焼成は良好で器壁を薄く仕上げている。53は数条の沈線の間に押し引き文を施すものであるが、この押し引き文は施文しない部分もある。54～62は沈線の間に先端が平坦なヘラ状のもので押圧文を施すものである。口縁部は山形になると考えられるもの（55, 58, 59）と、平坦なもの（54, 56, 57）とがある。胎土はいずれも石英を含んでおり、57は他に雲母を含んでいる。色調は褐色あるいは暗赤褐色を呈している。63～65はヘラ状のもので沈線文を施すものである。66～69は縦あるいは横の沈線と斜位の沈線とを組み合したものである。胎土は石英、石灰粒、雲母を含み、焼成はやや軟質である。色調は赤褐色あるいは暗赤褐色を呈している。70は横位あるいは斜位の沈線をヘラ状のもので施文している。71～77は斜位の沈線文を施したもので、75はこの沈線文の下に横の沈線を施し、文様の区切りとしている。胎土はいずれも石英、雲母を含み、75には石灰粒の混入がみられる。焼成はいずれも良好で色調は褐色あるいは暗赤褐色を呈している。78, 79はわずかに肥厚する部分に刺突による連点文を施すものである。78は内面にわずかに条痕がみられる。79は表面は磨滅が激しいが、外面にわずかに条痕が観察される。80は口縁部が直線的に内傾するもので、ヘラ状のものにより、斜位の沈線文を施文するものである。胎土に石英、雲母を含んでおり、焼成は良好で、色調は褐色を呈している。81は右方向からの刺突による連点文を施すものである。82は頸部でわずかに内側に屈折し、口縁部は外反するもので、外面と内面上部はヘラミガキで仕上げている。83は細かい条痕を外面はほぼ縦方向、内面はほぼ横方向に施文している。84は口唇部が肥厚して端部が外側に垂れ下がりぎみになるもので、外面にヘラ状のものにより斜位に施文された沈線がわずかに観察される。胎土に石灰粒を含み、焼成は良好である。色調は暗赤褐色を呈している。85は胴部がふくらむと考えられるもので、突帯をはさむように上下にやや横方向からの押圧による連点文を施している。

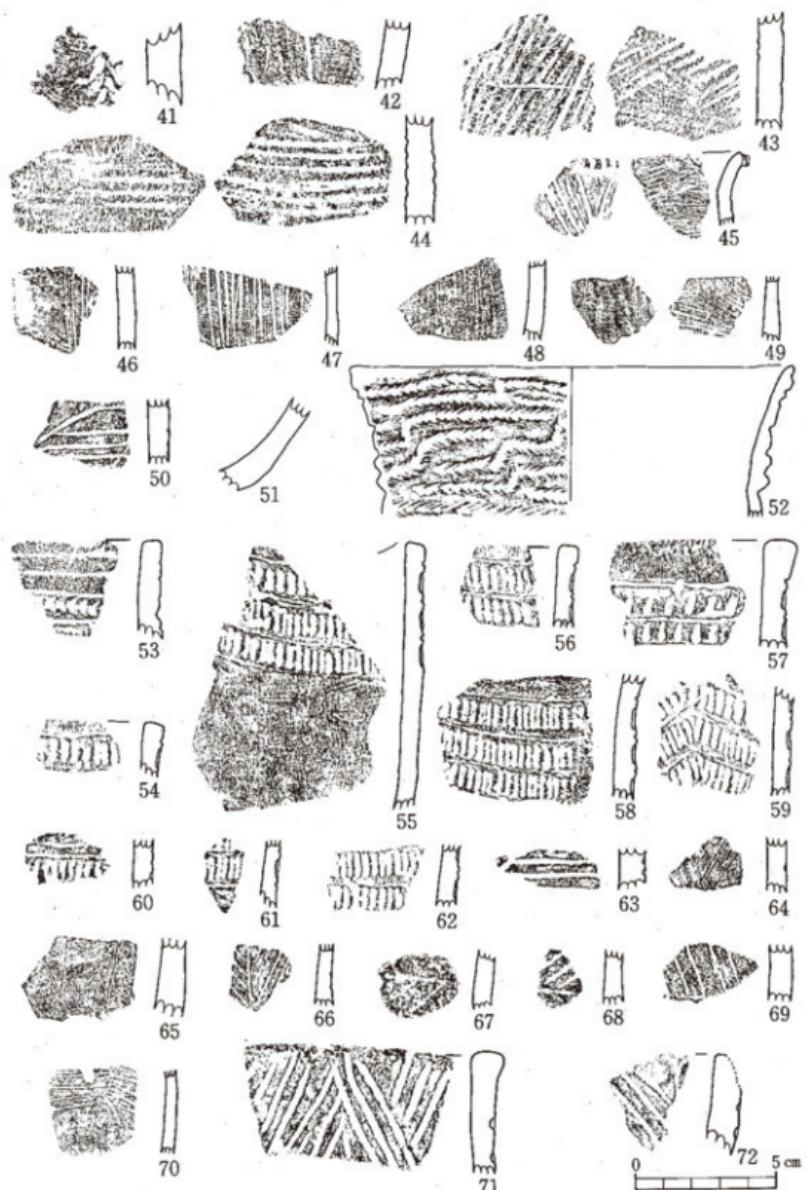
86は口縁部が断面三角形に肥厚する無文の土器である。87～89は口縁部がわずかに肥厚する無文の土器である。いずれも胎土に石灰粒、雲母を含み、焼成は良好である。色調は黄褐色を呈している。90は焼成前に穿孔した2つの穴をもつものである。91は丸みをもつ胴部の破片でヘラ状のもので施文した横位の2本沈線の間に斜位の沈線を施文している。92は平底になると考へられる底部の破片で内面にわずかに条痕文が観察される。93は漆黒色をした上質の黒曜石の破片である。

94はサメ歯の加工品の完形品でサメ歯独特の切縁の鋸歯状がみられる。歯骨部に両側から3孔を穿っている。穴の内径はすべて約1ミリである。大きさは歯骨部分が19.8ミリ、中央の歯冠部分が13.2ミリ、重さは約0.45gを計る。95～101は貝製の小玉である。イモガイ類の螺塔部を切断し研磨によって仕上げている。これらはその形状等により2種に分類される。95～98は両側から研磨して薄く両面とも平坦に仕上げている。99～101は両側から研磨しているが螺塔部の細くなる形を残すものである。大きさは最大径が95からそれぞれ9.2ミリ、9.65ミリ、5.45ミリ、3.95ミリ、6.05ミリ、8.8ミリ、7.9ミリで、穴の大きさは95からそれぞれ4.3ミリ、4.15ミリ、1.95ミリ、1.25ミリ、1.15ミリ、2.15ミリ、0.8ミリである。最大厚が95からそれぞれ1.45ミリ、1.15ミリ、1.6ミリ、2.8ミリ、3.65ミリ、3.9ミリ、2.95ミリである。重さは95からそれぞれ約0.15g、0.15g、0.05g、0.05g、0.15g、0.25g、0.2gを計る。

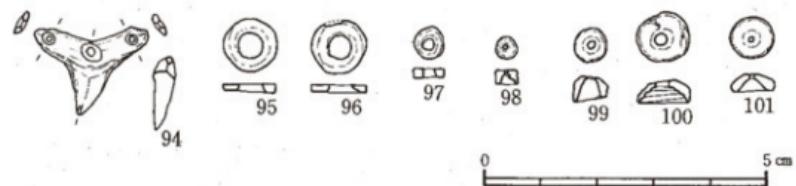
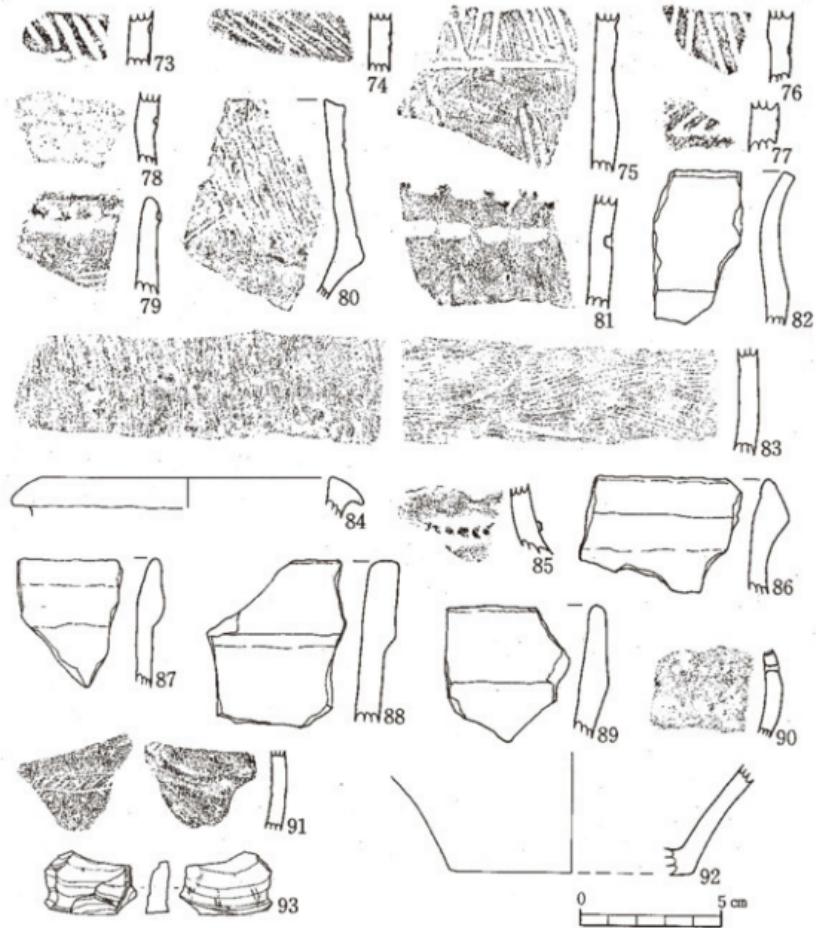
第3表 B-4, 5区, C-8区出土土器一覧表

挿図	番号	出土区	層位	胎 土	焼 成	色 調	備 考
15	35	B-4・5		石英、石灰粒、角閃石	やや軟質	暗赤褐色	
タ	36	タ		石英、石灰粒、角閃石	タ	タ	
タ	37	タ		石英、石灰粒、雲母	良 好	赤褐色	
タ	38	タ		石英、雲母	タ	淡赤褐色	
タ	39	タ		石英、石灰粒	タ	暗赤褐色	喜念I式
タ	40	タ		石英、石灰粒	タ	赤褐色	
17	41	C-8		石英、雲母	やや軟質	タ	
タ	42	タ		石英、雲母	タ	タ	
タ	43	タ		石英、石灰粒、雲母、角閃石	タ	褐色	
タ	44	タ		石英、石灰粒、雲母、角閃石、細礫	タ	タ	
タ	45	タ		石英、雲母	良 好	タ	
タ	46	タ		石英、石灰粒	やや軟質	暗赤褐色	
タ	47	タ		石英、石灰粒、雲母	タ	黄褐色	
タ	48	タ		石英、石灰粒	タ	暗赤褐色	
タ	49	タ		石英、石灰粒	タ	タ	
タ	50	タ		石英、石灰粒、雲母	タ	タ	
タ	51	タ		石英、石灰粒、雲母	良 好	淡黃褐色	

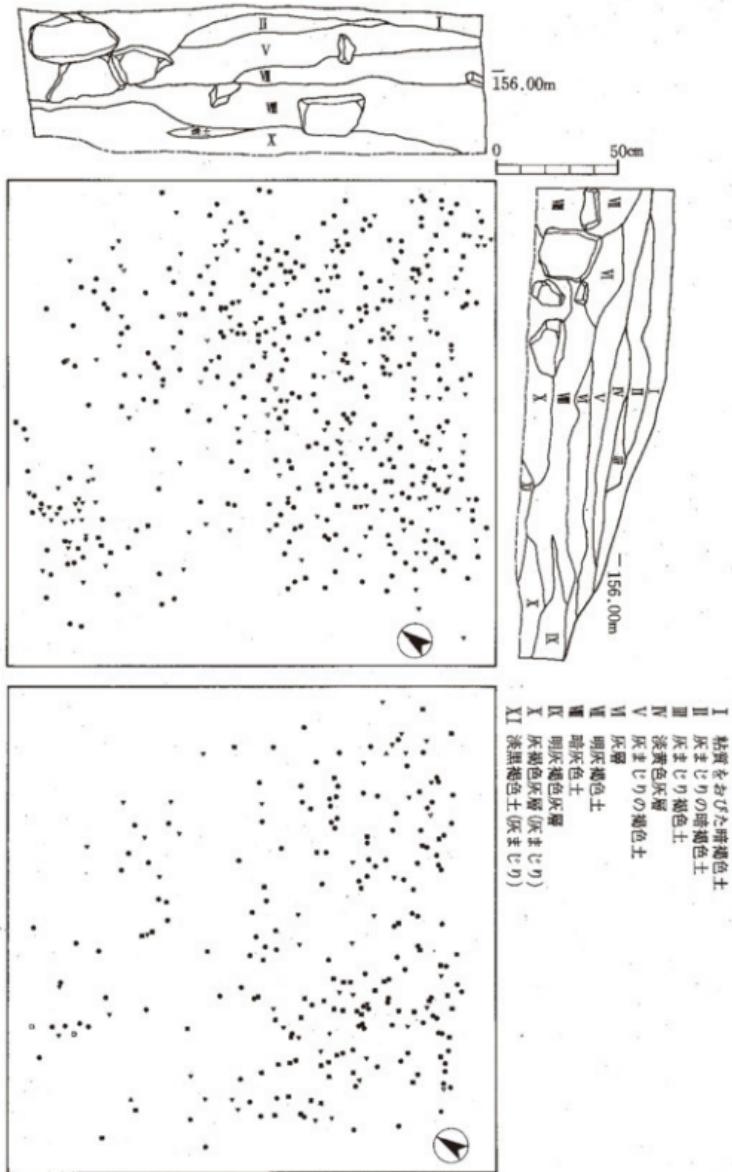
捕図	番号	出土区	層位	胎土	土	焼成	色調	備考
17	52	C—8		石英, 雲母		良好	淡褐色	
タ	53	タ		石英, 雲母		タ	暗赤褐色	
タ	54	タ		石英, 石灰粒		タ	褐色	
タ	55	タ		石英, 細礫		タ	タ	
タ	56	タ		石英, 細礫		タ	タ	
タ	57	タ		石英, 雲母, 細礫		タ	タ	
タ	58	タ		石英, 細礫		タ	タ	
タ	59	タ		石英, 細礫		タ	タ	
タ	60	タ		石英, 細礫		タ	タ	
タ	61	タ		石英, 細礫		タ	タ	
タ	62	タ		石英, 細礫		タ	タ	
タ	63	タ		石英, 石灰粒, 細礫		タ	淡褐色	
タ	64	タ		石英, 雲母		タ	暗赤褐色	
タ	65	タ		石灰粒, 雲母		タ	暗茶褐色	
タ	66	タ		石英, 細礫		タ	黄褐色	
タ	67	タ		石英, 石灰粒, 雲母	やや軟質	赤褐色		
タ	68	タ		石灰粒, 雲母	タ	黄褐色		
タ	69	タ		石灰粒, 雲母	タ	暗赤褐色		
タ	70	タ		石灰粒	タ	タ		
タ	71	タ		石英, 雲母	タ	褐色		
タ	72	タ		石英, 雲母	タ	黄褐色		
18	73	タ		石英, 雲母	タ	タ		
タ	74	タ		石英, 雲母	タ	タ		
タ	75	タ		石英, 石灰粒, 雲母	タ	暗赤褐色		
タ	76	タ		石英, 雲母	良好	黄褐色		
タ	77	タ		石英, 雲母	タ	タ		
タ	78	タ		石英, 雲母	タ	タ		
タ	79	タ		雲母	やや軟質	淡黄褐色		
タ	80	タ		石英, 雲母	良好	褐色		
タ	81	タ		石英, 石灰粒, 雲母	タ	暗赤褐色		
タ	82	タ		石英	タ	褐色		
タ	83	タ		石英, 石灰粒,	タ	タ		
タ	84	タ		石灰粒	タ	暗赤褐色		
タ	85	タ		石英, 石英粒, 雲母	タ	タ		
タ	86	タ		石灰粒, 雲母	タ	褐色		
タ	87	タ		石灰粒, 雲母	タ	黄褐色		
タ	88	タ		石灰粒, 雲母	タ	タ		
タ	89	タ		石灰粒, 雲母	タ	タ		
タ	90	タ		石灰粒, 雲母	タ	タ		
タ	91	タ		石灰粒, 雲母	やや軟質	褐色		
タ	92	タ		石灰粒, 細礫	良好	暗赤褐色		



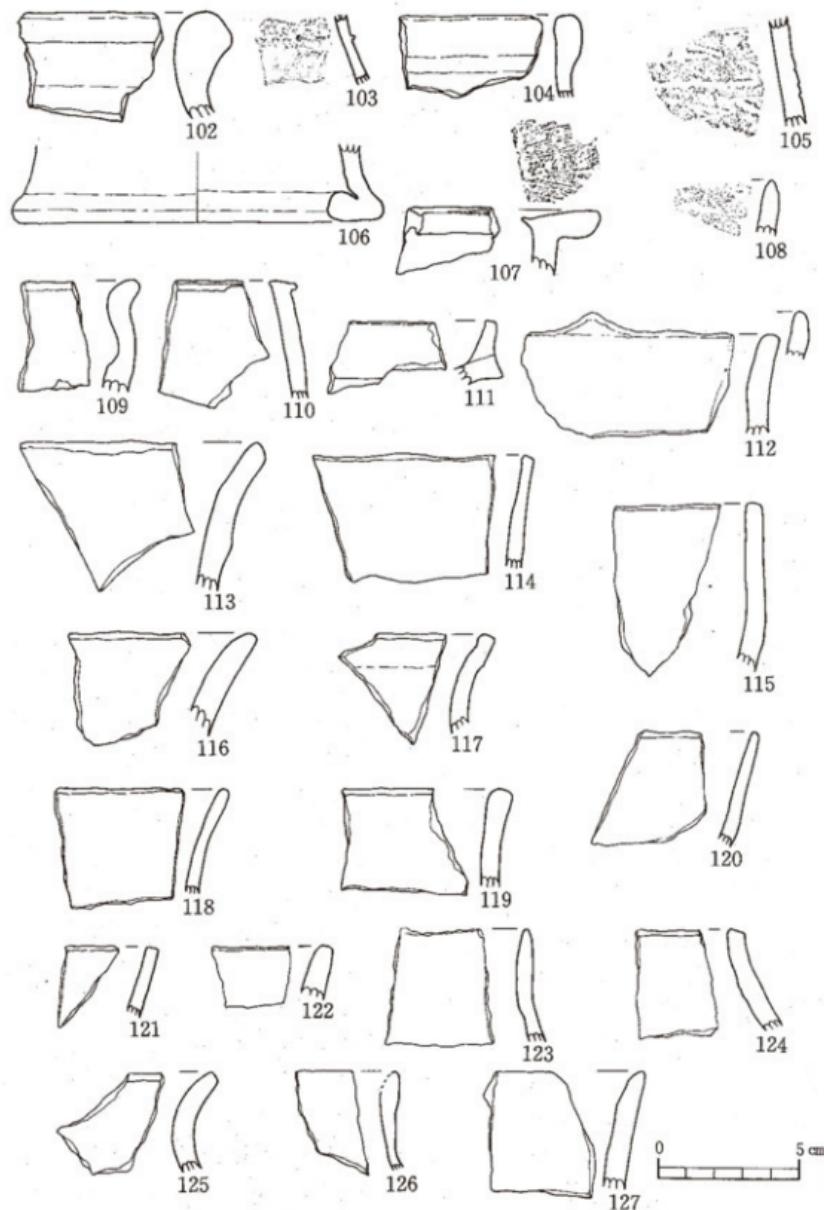
第17図 C-8区出土土器



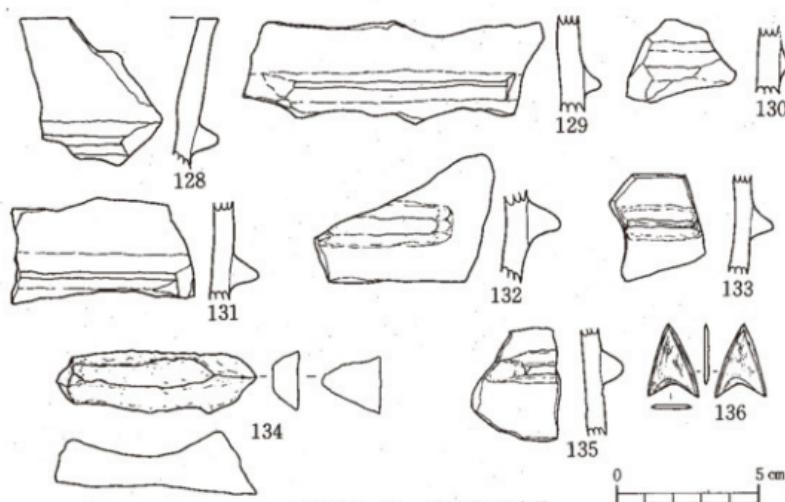
第18図 C-8区出土遺物



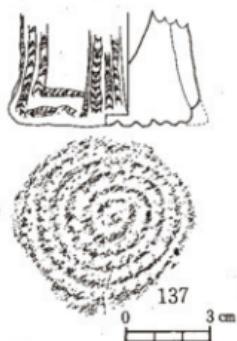
第19図 C-11区遺物出土状況と断面図



第20図 C-11区出土土器



第21図 C-11区出土遺物



第22図 C-11区出土土器

C-11区

洞穴入口のテラス部に $2\text{m} \times 2\text{m}$ のトレンチを設定した。このテラスは洗い流された形跡がなく、遺物等の保存状況は良好であった。層位は東から西へ傾斜し途中の層位では落盤の礫がみられた。

C-11区では、縄文後期から弥生時代相当器の土器片が、アマオブネ、サザエ、アマガイ、タカラガイ等の貝、魚骨、獸骨、カニのハサミ等と一緒に出土した。獸骨については別項で記載した。

102は肥厚し外反する口縁部でヘラナデの痕がよく残っている。103は一条の微隆起突帯の上下に刺突が施された、いわゆるミミズばれ側点文の壺形土器である。104は肥厚した口縁部をもつ。105はヘラ沈線で菱形文様を描き、横位の沈線で区割りを行っている。106はくびれ底であるが、底部を内面に折り返し平坦面をもつ脚台と思われるものである。107は頃玖式土器に類似した逆L字状の口縁部をもつもので、口唇部には内面から外面にかけて、放射状に鋭いヘラ状施文貝により沈線を施している。109は外反しながら口唇部付近で再び、くの字状に外反するS字状の口縁をもつ土器であ

る。 111は外反する口縁部に直交して口唇部を貼り付けたものである。 112～122は外反する口縁をもつ壺形土器である。 112は口縁が波状口縁になる。 116は金雲母を含んでいる。 123～127は壺形土器の口縁部である。 124は口唇部が平坦に調整されていて石英を含んでいない。 128は平坦な口唇部をもち直下 3.5cmに断面三角形の貼り付け突帯をもつ。 129は断面台形の貼り付け突帯である。 130、 131は断面三角形の貼り付け突帯を施す。 132～135は外耳土器である。 132は長さ 5 cm 幅 1.7cm、 高さ 1.2cmの両側に丸味のある突帯を貼り付けている。 134は両端瘤状になった突帯が剝離したものである。

136は長さ 2.6cm、 幅 1.7cm、 厚さ 0.2cm、 重さ 0.65g の貝鏃である。 扁平無茎のもので基部にえぐりがみられ、 鑄が先端部付近で両方に分かれ基部まで続く。 本土の弥生時代の磨製石鏃に類似している。 材質は真珠光沢をもつ二枚貝と思われる。

137は面繩束洞式土器の底部である。 4か所の張り付け突帯を縦位に施し、 二叉状施文具によって押し引き文様を施している。 突帯部には六条、 突帯間には二条の押し引きがあり、 突帯の文様は右上から下位へいき、 再び左下から上位へと繰り返していく。 底部は、 中央部から右回りの渦巻き状に、 やはり、 二叉状施文具によつて押し引き文を施している。 胎土には、 雲母・石英・石灰粒を含み、 色調は暗茶褐色である。 焼成はやや粗である。

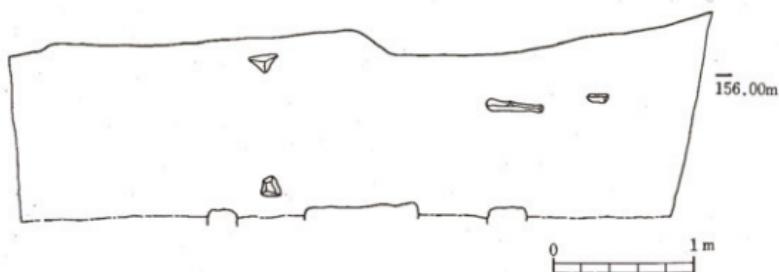
第4表 C-11区出土土器一覧表

捕団	番号	出土区	層位	胎 土	焼 成	色 調	備 考
20	102	C-11		石英、 石灰粒	良 好	赤褐色	
々	103	々		石英、 石灰粒	良 好	淡赤褐色	
々	104	々		石英、 石灰粒、 雲母	良 好	褐色	
々	105	々		石英、 石灰粒、 細粒	良 好	暗茶褐色	
々	106	々		石英、 石灰粒	良 好	暗茶褐色	
々	107	々		石英、 石灰粒、 細粒	良 好	暗茶褐色	
々	108	々		石英、 石灰粒、 雲母	良 好	暗茶褐色	
々	109	々		石英、 石灰粒	良 好	赤褐色	
々	110	々		石灰粒	良 好	暗茶褐色	
々	111	々		石英、 石灰粒	良 好	暗茶褐色	
々	112	々		石英、 石灰粒、 雲母	良 好	暗茶褐色	
々	113	々		石英、 石灰粒	良 好	褐色	
々	114	々		石英、 石灰粒、 雲母	良 好	褐色	
々	115	々		石英、 石灰粒	良 好	褐色	
々	116	々		石英、 石灰粒、 雲母	やや軟質	暗茶褐色	
々	117	々		石英、 石灰粒	良 好	茶褐色	

持図	番号	出土区	層位	胎 土	焼 成	色 調	備 考
20	118	C-11区		石英, 石灰粒	良 好	褐色	
タ	119	タ		石英, 石灰粒	良 好	赤褐色	
タ	120	タ		石英, 石灰粒	良 好	褐色	
タ	121	タ		石英, 石灰粒	良 好	褐色	
タ	122	タ		石英, 石灰粒	良 好	褐色	
タ	123	タ		石英, 石灰粒	良 好	暗褐色	
タ	124	タ		石灰粒	良 好	暗褐色	
タ	125	タ		石英, 石灰粒	良 好	暗茶褐色	
タ	126	タ		石英, 石灰粒	良 好	暗赤褐色	
タ	127	タ		石灰粒, 雲母	良 好	暗黄褐色	
21	128	タ		石英, 石灰粒, 雲母	良 好	暗茶褐色	
タ	129	タ		石英, 石灰粒, 雲母	良 好	赤褐色	
タ	130	タ		石英, 石灰粒	良 好	暗茶褐色	
タ	131	タ		石英, 石灰粒	良 好	暗褐色	
タ	132	タ		石英, 石灰粒	良 好	褐色	
タ	133	タ		石英, 石灰粒	良 好	暗茶褐色	
タ	134	タ		石英, 石灰粒	良 好	暗褐色	
タ	135	タ		石英, 石灰粒	良 好	暗茶褐色	
22	137	タ		石英, 石灰粒, 雲母	普通	暗茶褐色	

D-17, 18, 19区

D-17, 18, 19区は洞穴の入口前の一高くなつた部分である。現在はキビ畑となつてゐるが、以前は水田であったとの聞き込みにより、遺構、遺物等の検出のため2×5mの大きさで掘り下げを行つた。しかし約80cm掘り下げたところ水が湧き出し、約1.2m掘り下げたがすべて埋め土で、礫が出はじめ、さらに水のため壁面の崩壊がひどくなつたため掘り下げを中断した。遺物等はまったくみられなかつた。



第23図 D-17, 18, 19区土層断面図

第6章 まとめ

ヨヲキ洞穴では、薄暗くライトの光だけと暗川のため、掘り下げるにつれ湧水があり作業は難行をきわめた。

調査の結果、ヨヲキ洞穴内では縄文時代、弥生時代相当期、12~13世紀まで何回もの生活跡が認められた。トレンチ別に要点をまとめ若干の考察をくわえた。

C-2区 焼土の検出があったため下層の確認は行わなかったが、表層から大山式と思われる肥厚口縁部に横捺刻文の刻まれたものが出土した。また陶質土器も出土している。

K-4区 ここでは陶質土器がまとまって出土しており、この上で火をたいたと考えられる状態で、生活跡を想像させる。この中の木炭片による¹⁴C年代の測定値は

K S U-1214 750±70 B. P. 木炭

であった。この年代は昨年度調査の行われたカムイヤキ古窯跡群の年代測定結果^Dとほぼ同一の年代である。

カムイヤキ古窯跡群はヨヲキ洞穴から約300mの地点あり、また今回洞穴から見える位置にヤナギダ古窯跡が確認された。これらのこととはこの周辺一帯が陶質土器的一大産地とはる可能性もあり、今後はこれらの関係についても検討する必要があろう。

B-4・5区 38は、犬田布貝塚で出土したⅢ類^P(肩部に二叉状工具によって施された刻目をもつ突帶で頸部は羽状文を鋭利なヘラ状工具で施している)と同様のものである。35、36はクシ状施文具によって文様を構成しているもので38と同層から出土している。

C-8区 41はヘラ状の工具で羽状に短沈線を押圧土器で、沖縄県沖縄市室川貝塚の下層出土のものを標式とする室川下層式に比定される。県内では西之表市の下剝峯遺跡の第Ⅳ類土器^Dが類似しており、面縄第4貝塚からも同様の土器が出土している。45は外反する口縁部の破片であるが、胴部が張り、底部は尖底もしくは丸底になると考えられるもので、面縄前庭式に比定される。この土器は大島郡から沖縄県の遺跡で多く出土しており、現在二十数ヶ所の遺跡が知られている。52は口縁部が肥厚して、この部分に押引き文を施文する土器で、面縄東洞式に比定される。この面縄東洞式は市来式土器と共に伴することから縄文後期相当期に位置づけられている。53~65は嘉徳Ⅰ式に比定される。口縁部が山形になるものと平縁のもの2種類がある。このような土器は新奄美空港の長浜金久遺跡で多量に出土しており、その細分化が試みられている。⁶ 71~77は沈線文の土器で嘉徳Ⅱ式に比定される。85は連

点文の土器で大山式に比定されよう。86～89は無文の土器で宇宙上層式と呼ばれるものである。

94はサメ歯製の加工品である。本県では志布志町の片野洞穴他数例サメ歯の出土が知られているが、加工品としては現在のところ川内市の麦之浦貝塚⁹のものが1点ある。沖縄においてサメ歯の加工品は室川貝塚、浦添貝塚、シヌグ堂遺跡他数例知られているが図のように3孔を穿つものは具志川島遺跡出土の貝製でサメ歯製品を模したものがある。本品には穿孔の上部から製品上辺部にかけて擦痕と見られる痕跡が3孔とも観察されるが、中でも中央のものがわずかに凹み顯著である。穿孔部分にはこの痕跡は認められないため紐擦れとは考えにくい。また歯の部分の先端がわずかに折れている。

C-11区 遺物は上部に弥生相当期の壺形土器、斐形土器が出土し、下部からは102、109の様に本土の縄文土器に類似するものがみられた。また、海岸より約2km以外離れた内陸部の洞穴であるのに、小型の貝（アマオブネ、アマガイ、タカラガイ等30種）、魚骨、獸骨、カニのハサミが多く出土した。特にカニのハサミが多かった。特殊な遺物として貝鏃があげられる。これは本土の弥生時代によくみられる磨製石鏃に類似しているものである。石鏃は種ヶ島¹⁰、奄美大島¹¹で弥生相当期の土器と共に伴している。これは弥生文化の伝播が土器だけではなく石器までおよんだことと思われる。その下位からは、押し引き文様のある特殊な土器底部が出土した。これは嘉徳遺跡¹²（大島郡瀬戸内町）・久里原貝塚¹³（沖縄県伊平屋島）出土の土器に類似している。底部の渦巻き状押し引き文様、突帯部の文様等から面縄前庭式である。同層位から出土した貝によるC年代の測定値は3090±50であり、縄文時代後期に位置される。

C-11区では調査日数、予算の都合でC-8区の表層と同レベルの縄文後期の出土を確認して調査を終了した。

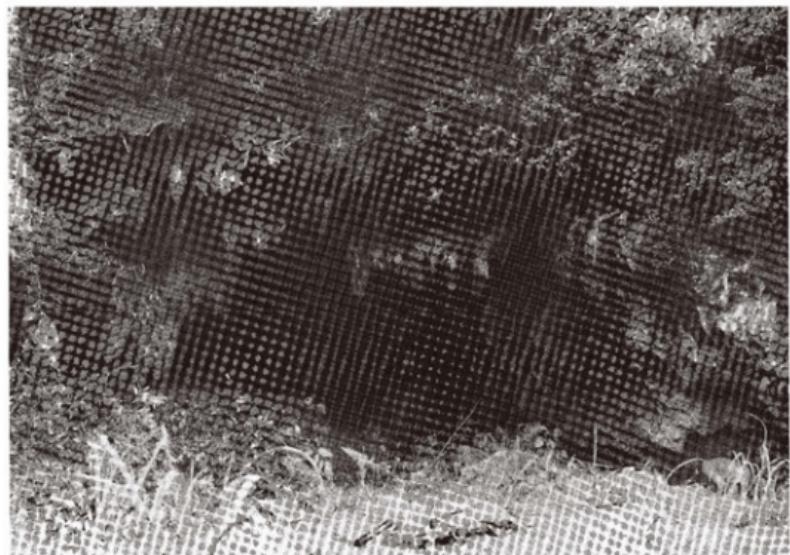
（引用文献）

- 1) 新東晃一、青崎和恵「カムイヤキ古窯跡群Ⅰ」伊仙町文化財発掘調査報告書(3) 1985
- 2) 吉永正史、宮田栄二「犬田布貝塚」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 1984
- 3) 新東晃一、立神次郎「下剣峯遺跡」西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書 1978
- 4) 吉永正史、牛浜ノ修他「面縄貝塚群」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 1985
- 5) 池畑耕一、牛浜ノ修他「あやまる第2貝塚」笠利町文化財報告(7) 1984
- 6) 弥栄久志、青崎和恵他「長浜金久遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書32 1985
- 7) 現在、川内市教育委員会において報告書作成中
- 8) 三島格「九州および南島出土の鮫歯製垂飾について」『日本民族とその周辺考古編』 1980
- 9) 3)と同
- 10) 河口貞徳、出口浩他「サウチ遺跡」鹿児島考古12号 1978
- 11) 河口貞徳他「嘉徳遺跡」鹿児島考古10号 1976

図 版



洞 穴 遠 景

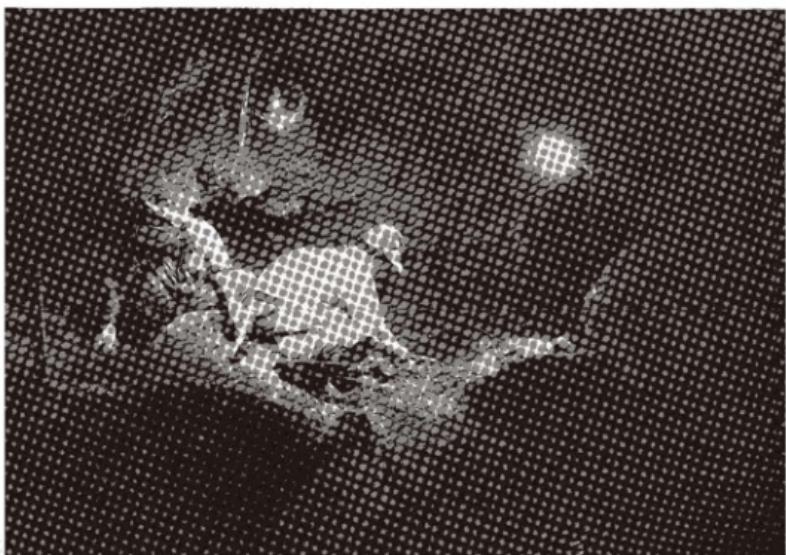


洞 穴 近 景

圖版 2



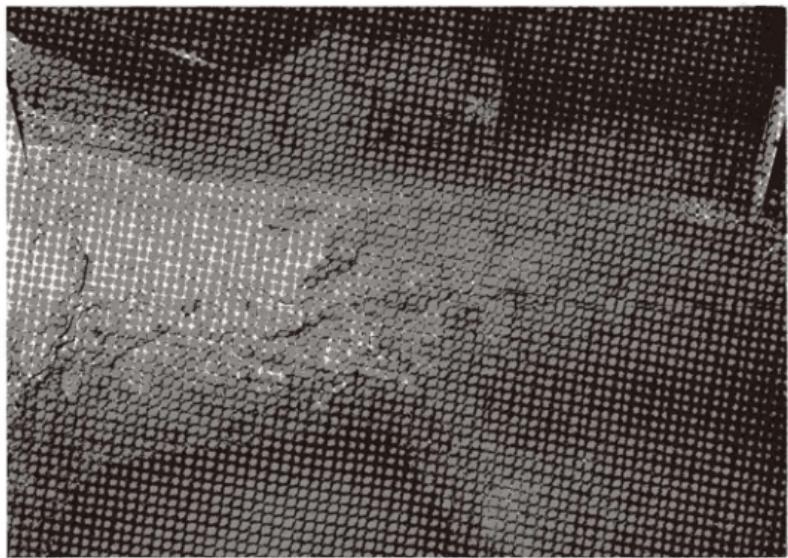
調査風景



調査風景

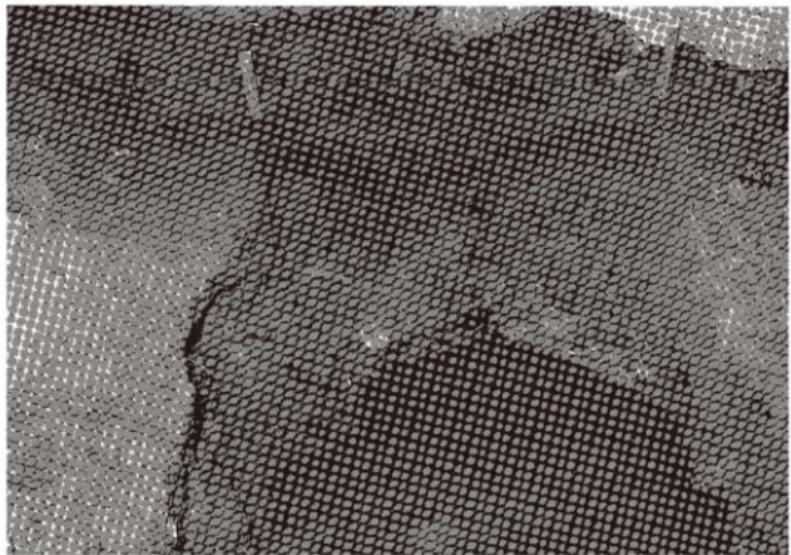


K — 4 区断面

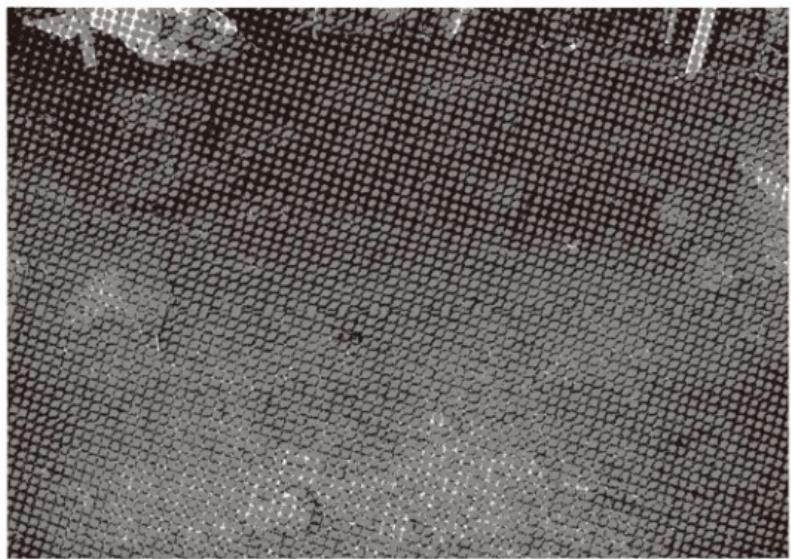


B 4 · 5 区断面

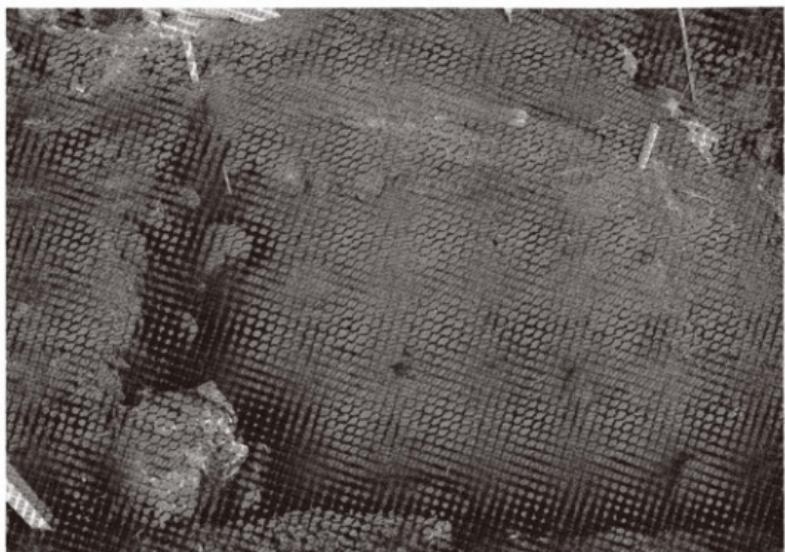
図版4



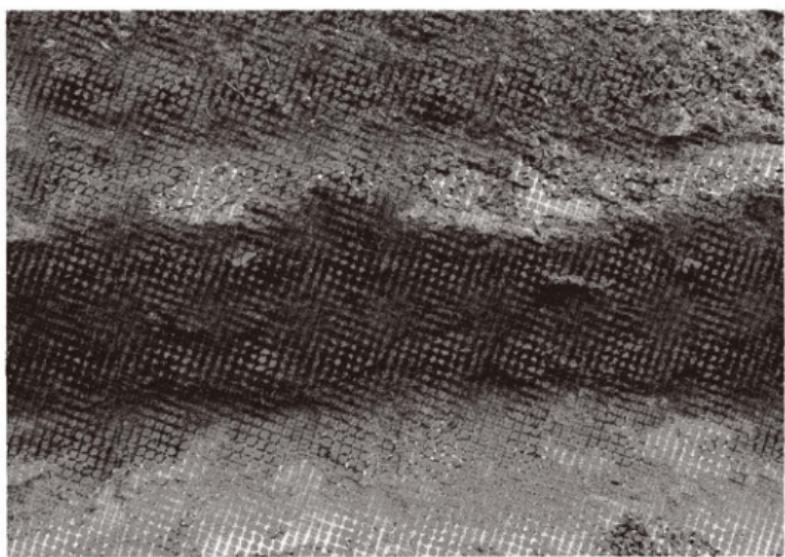
C - 8 区断面



C - 11 区断面

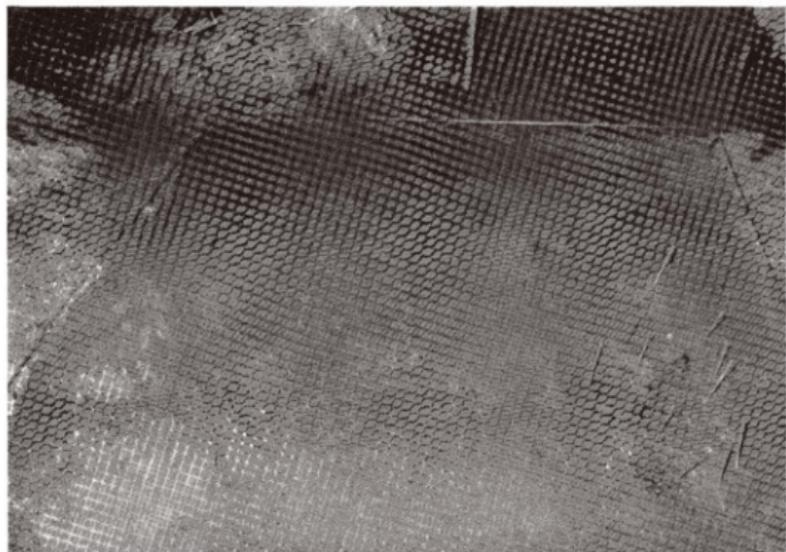


C—11区断面



D—17·18·19区断面

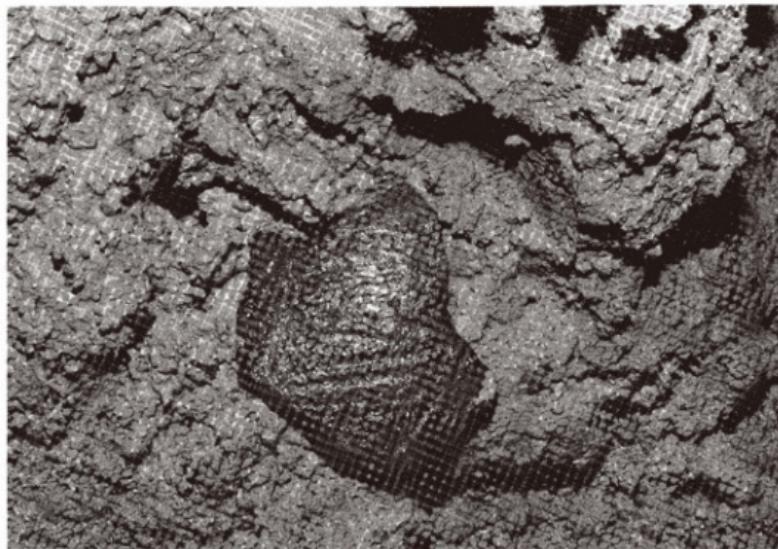
図版 6



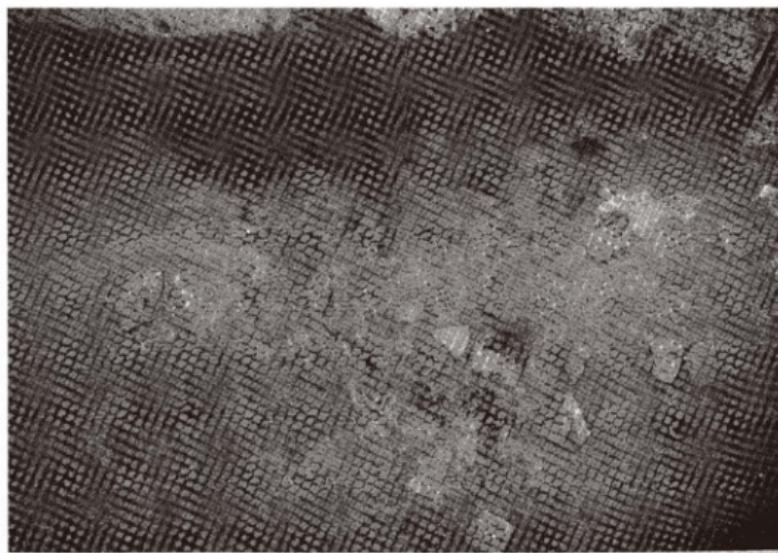
C—2区遺物出土状況



No.33出土状況

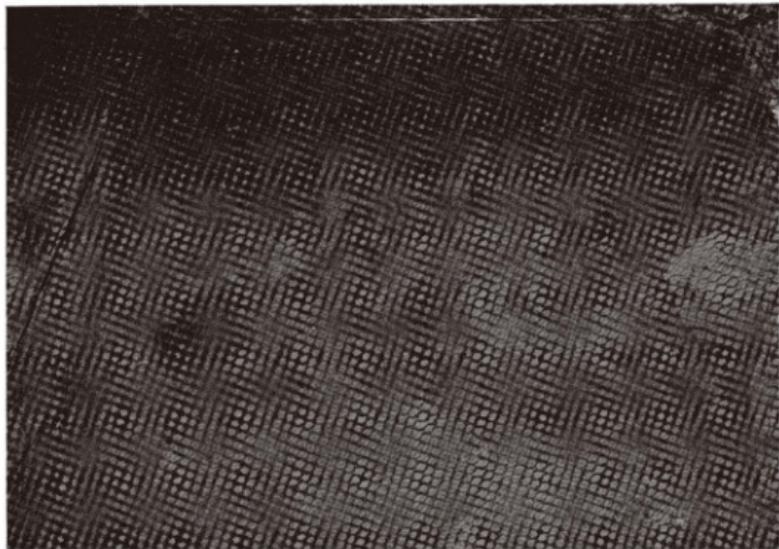


No. 30出土状況

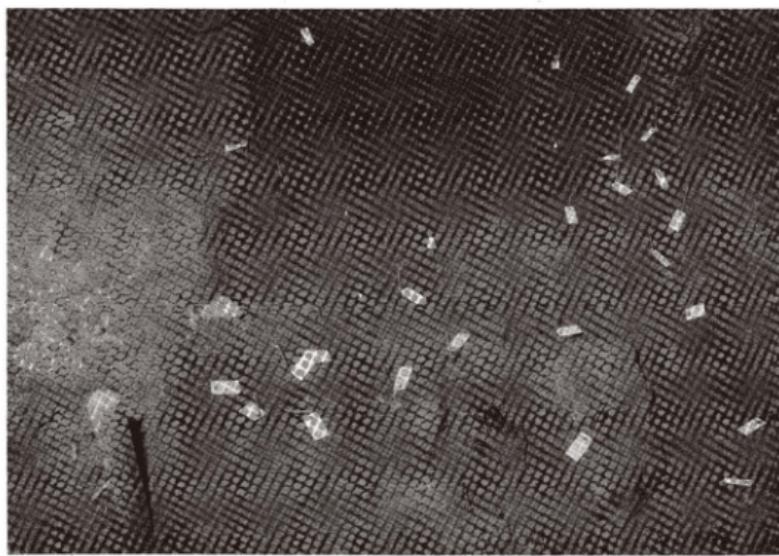


K-4区遺物出土状況

圖版 8



B—4・5区



C—8区遺物出土狀況

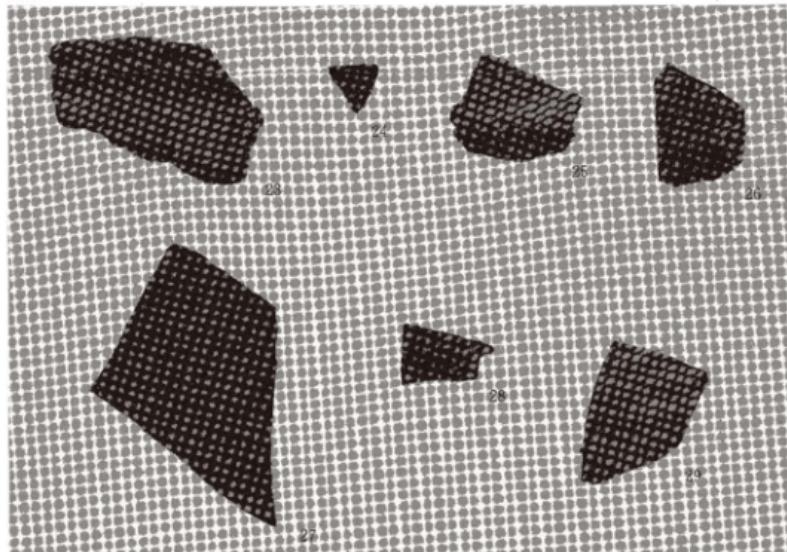


C—11区遺物出土状況

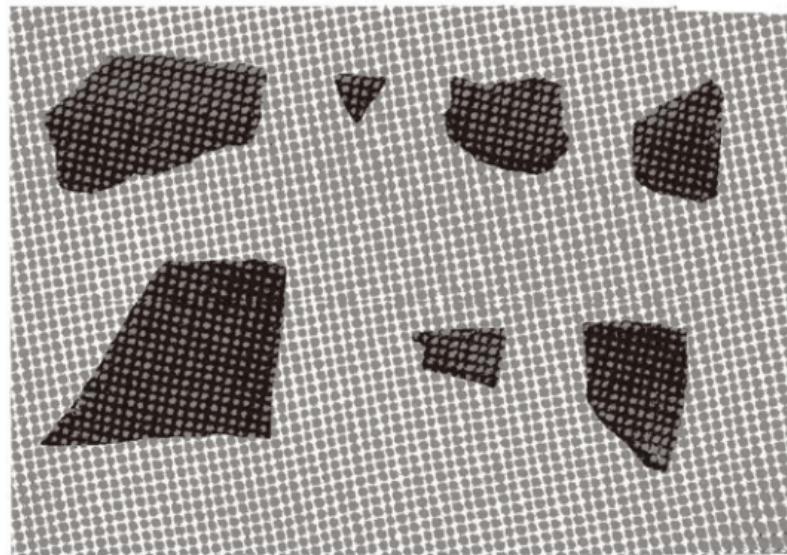


C—11区遺物出土状況

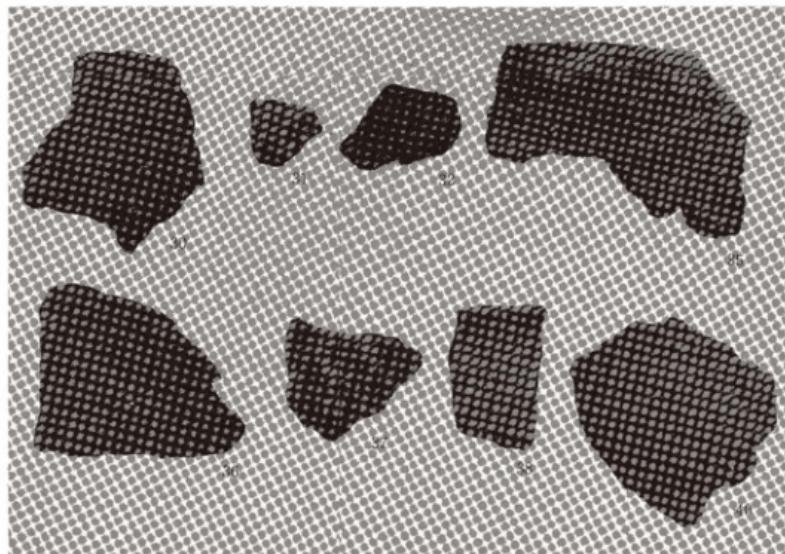
図版10



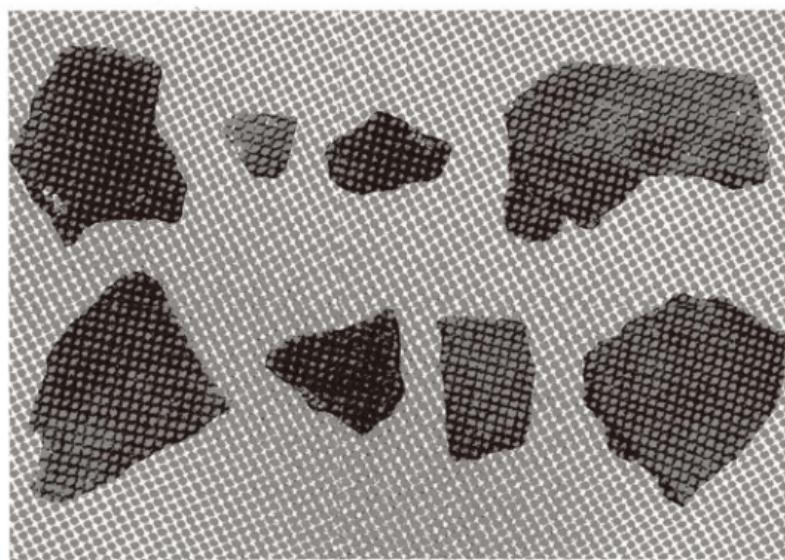
C-2区出土土器



C-2区出土土器(裏)

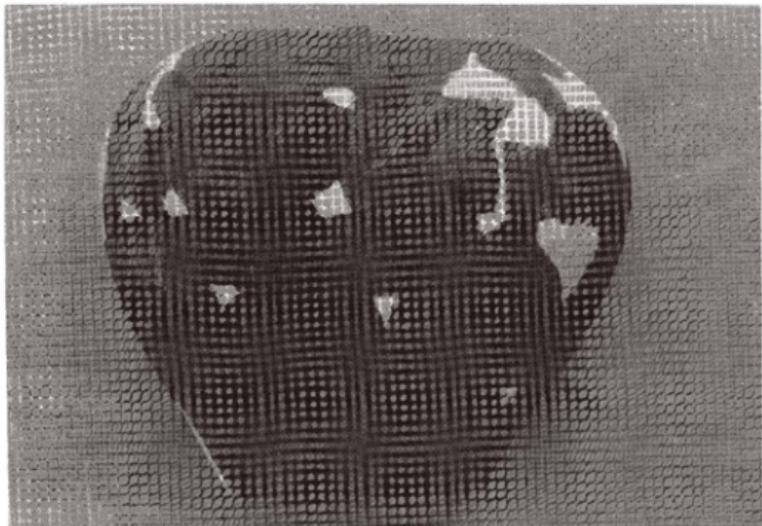


K-4区, B-4・5区出土土器

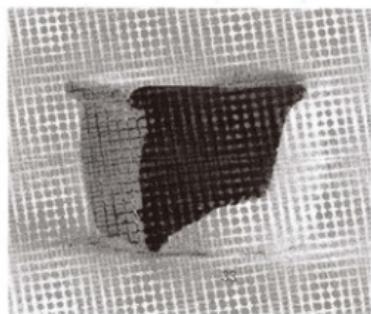


K-4区, B-4・5区出土土器(裏)

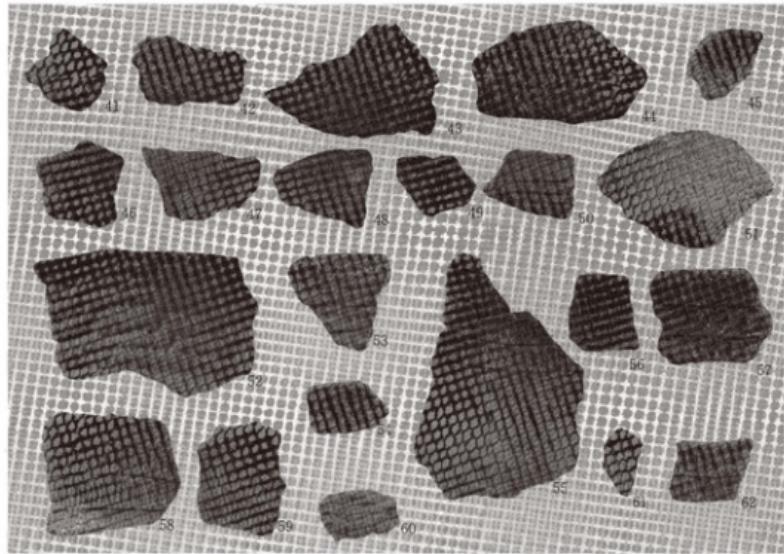
図版12



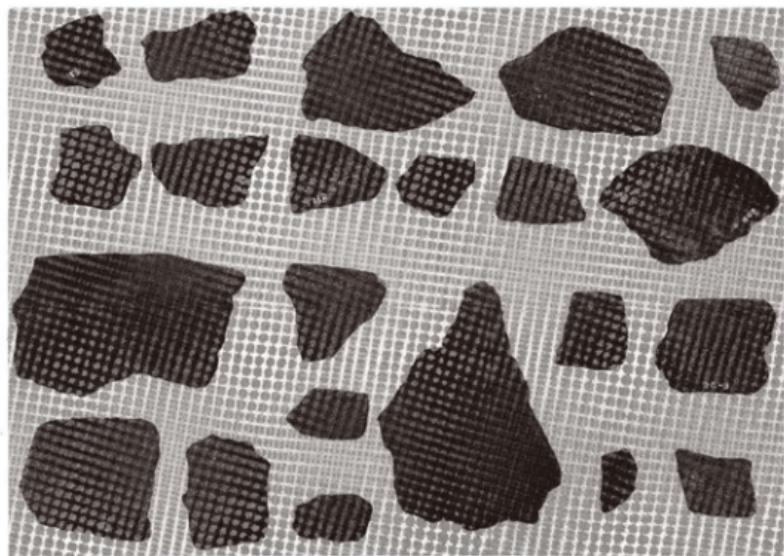
K—4区出土土器 (No.34)



K—4区, B—4・5区出土土器(裏)

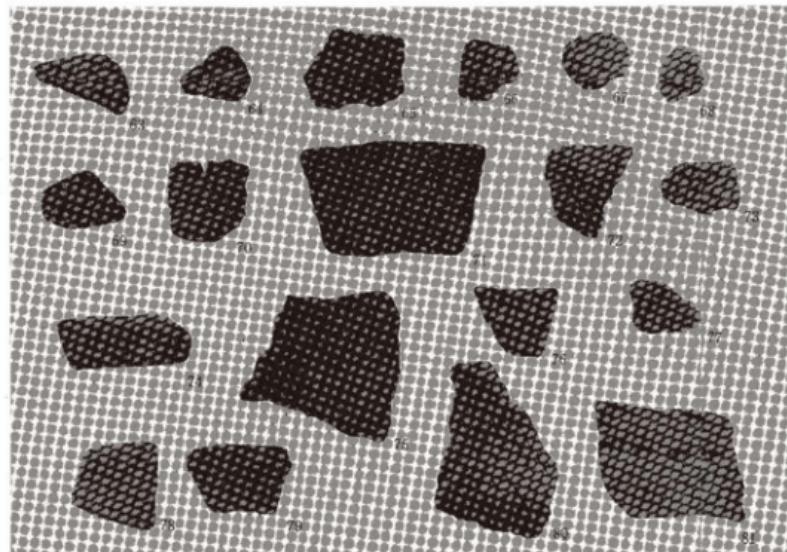


C-8区出土土器

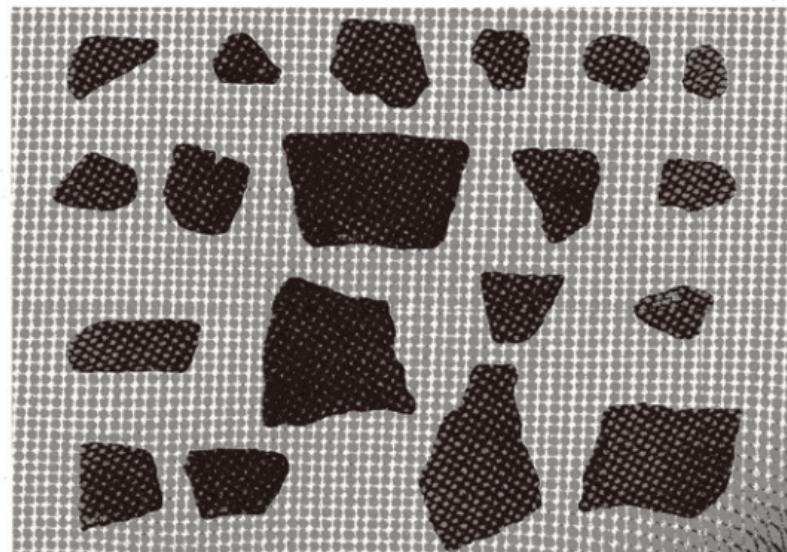


C-8区出土土器(裏)

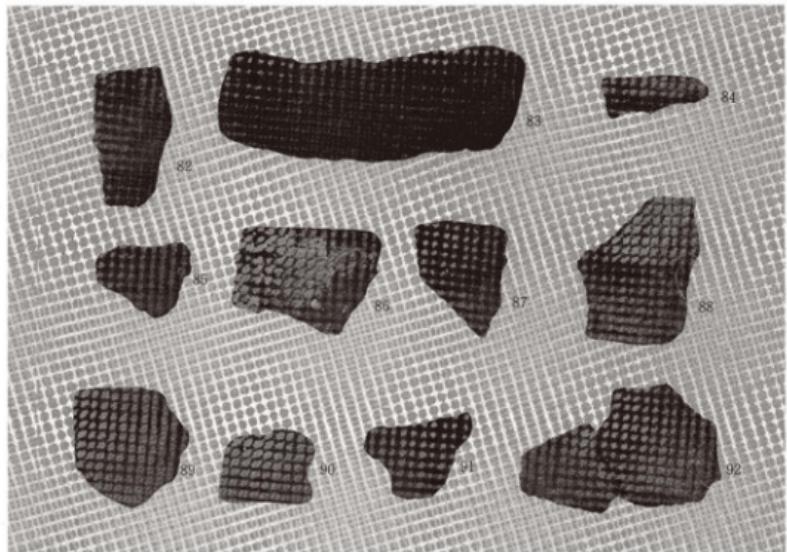
図版14



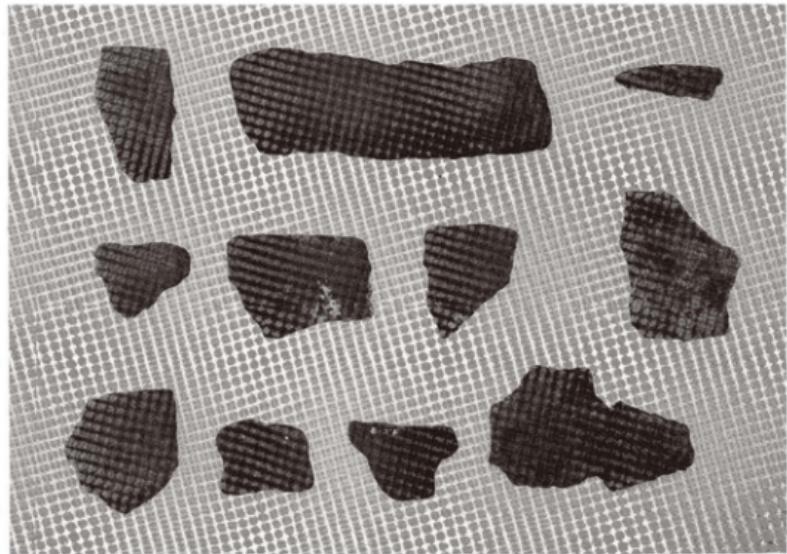
C-8区出土土器



C-8区出土土器(裏)

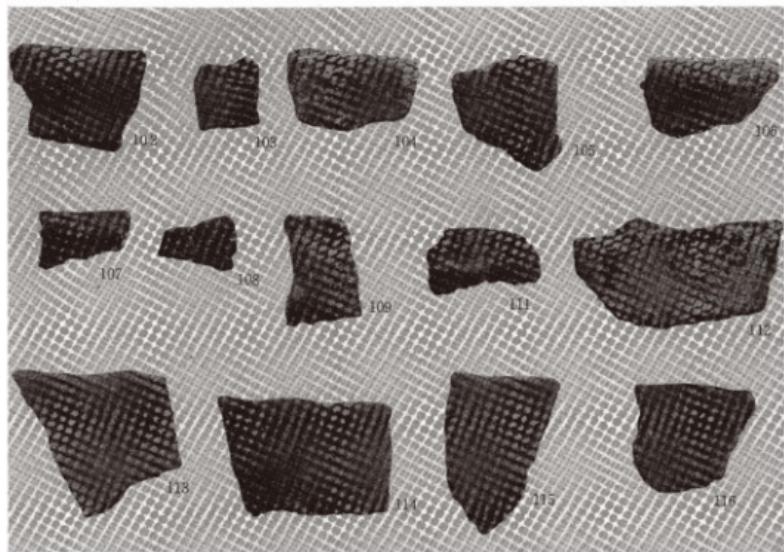


C—8 区出土土器

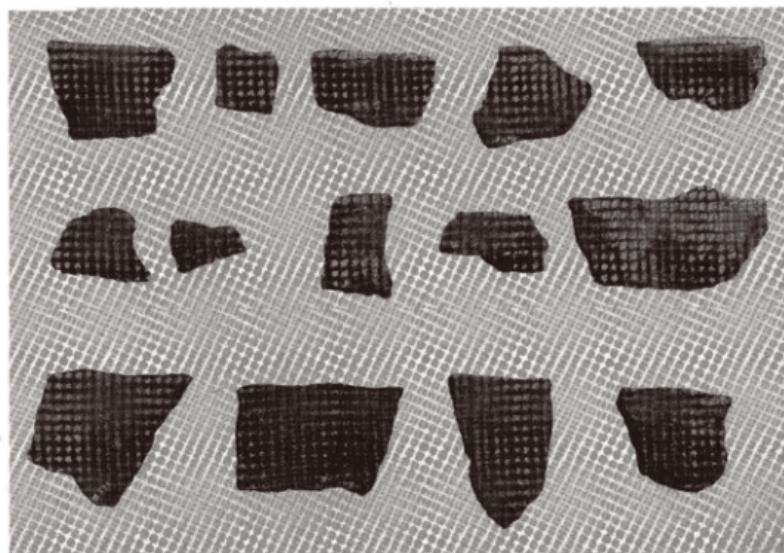


C—8 区出土土器(裏)

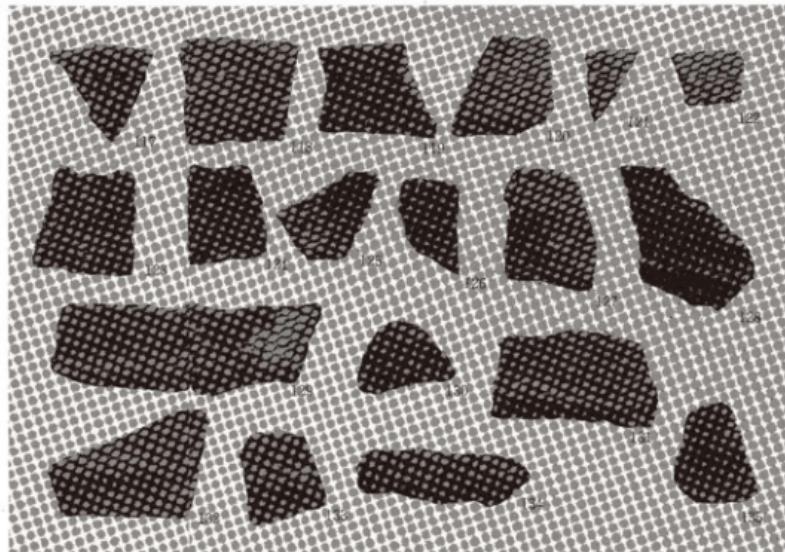
図版16



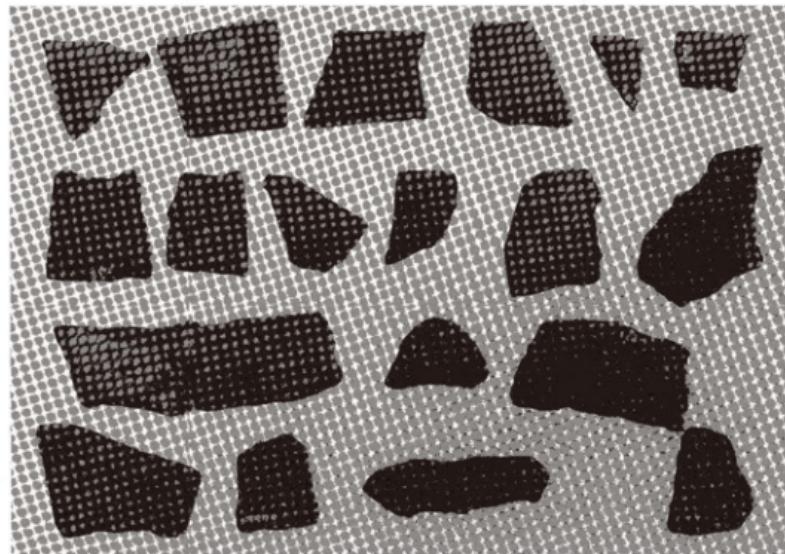
C—11区出土土器



C—11区出土土器(裏)

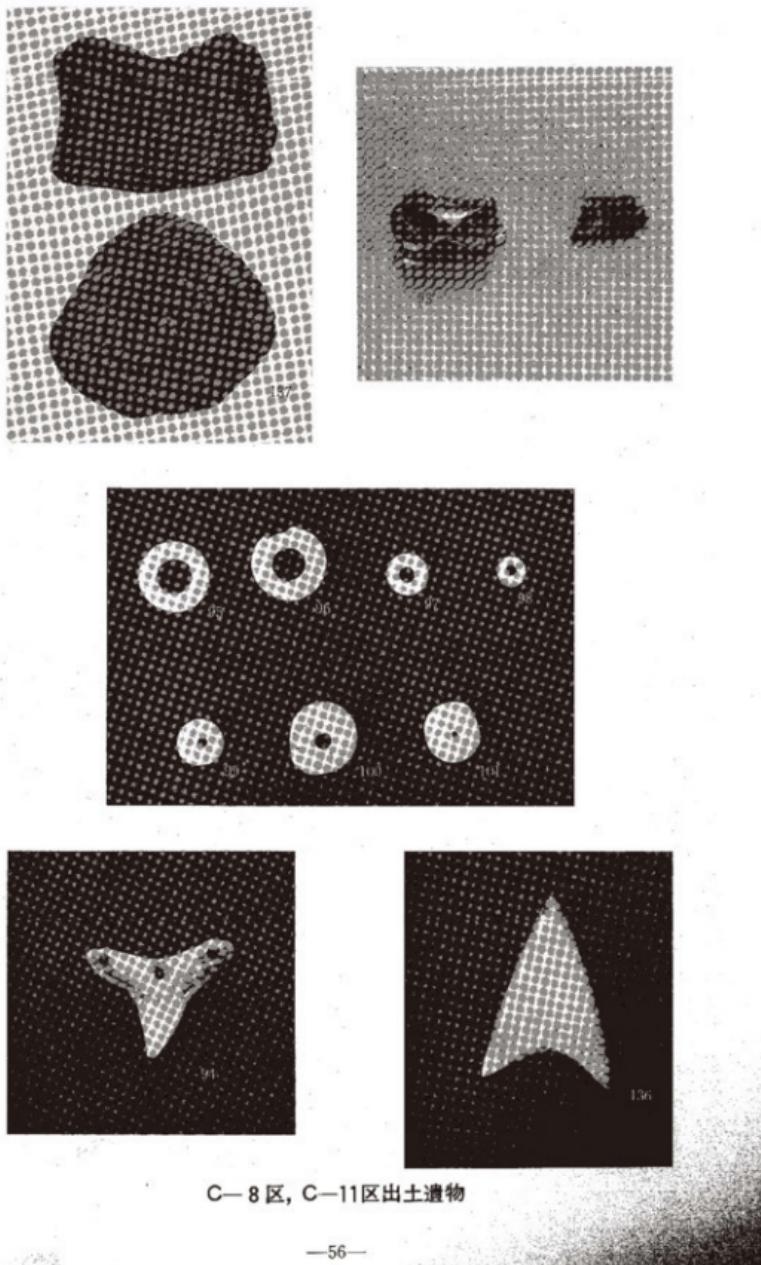


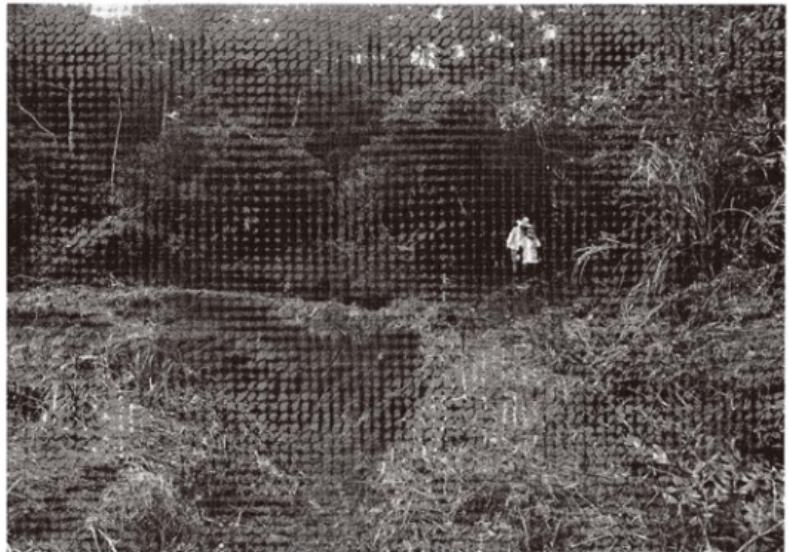
C-11区出土土器



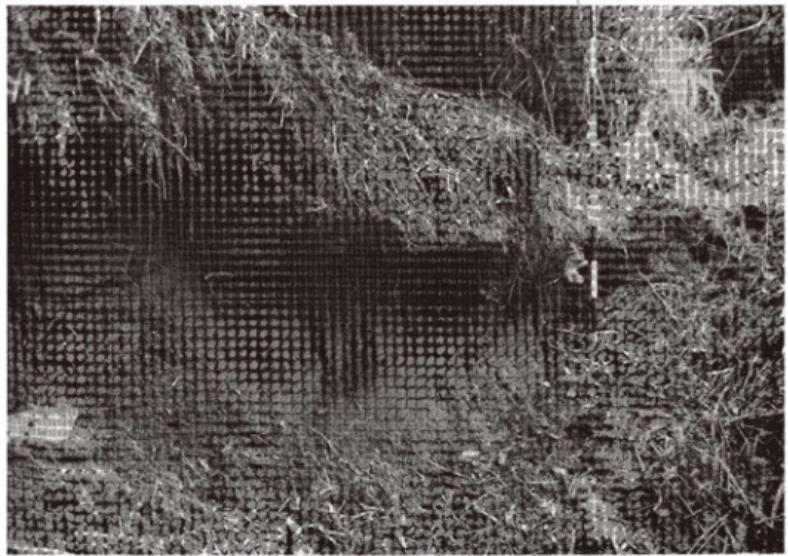
C-11区出土土器(裏)

図版18



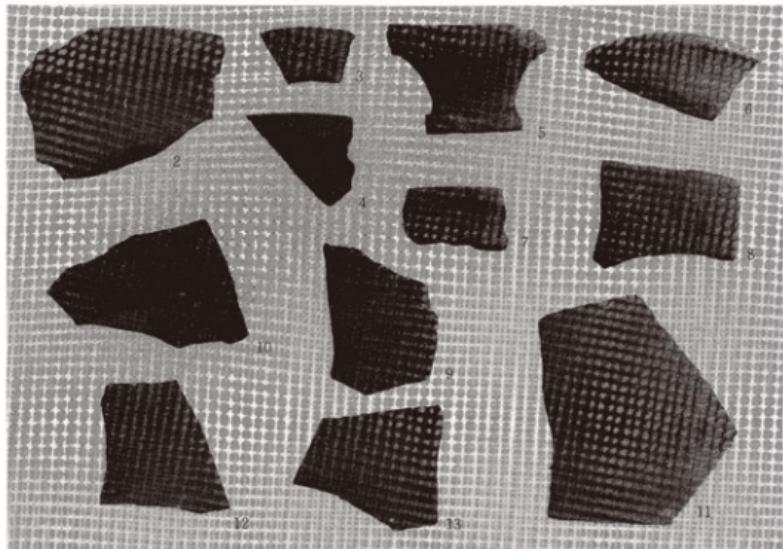


ヤナギダ古窯跡

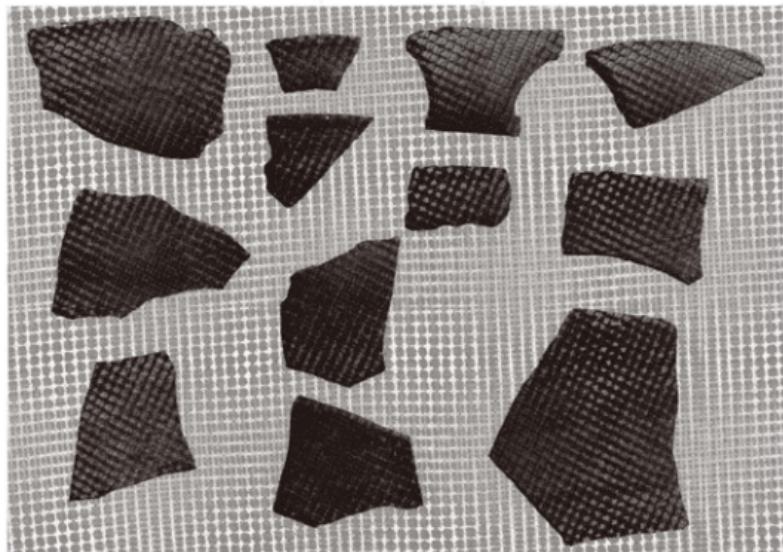


ヤナギダ古窯跡

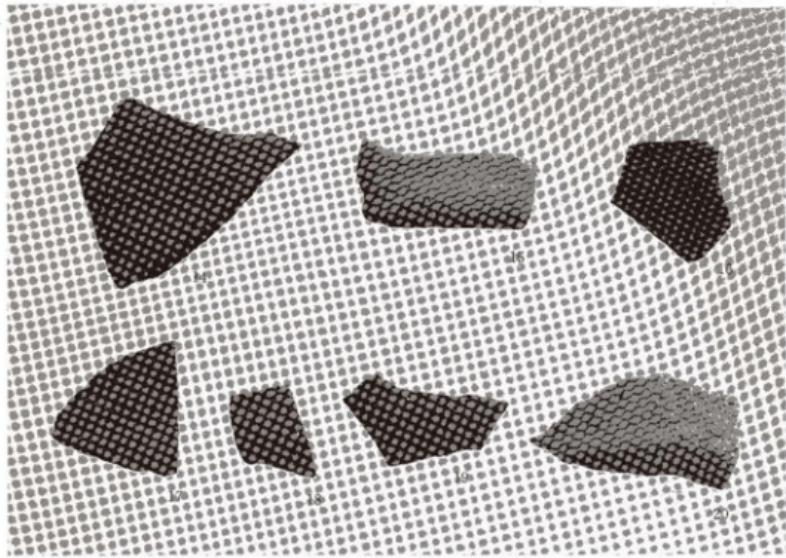
図版20



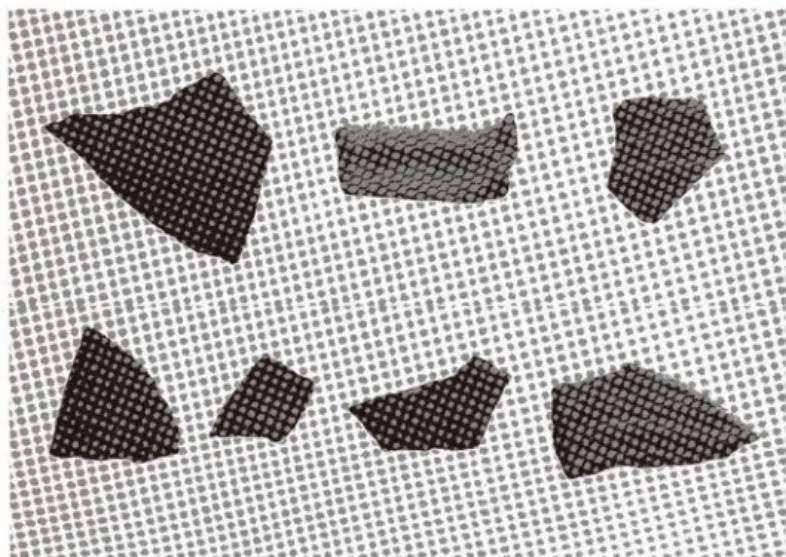
ヤナギダ古窯跡採集土器



ヤナギダ古窯跡採集土器(裏)



ヤナギダ古窯跡採集土器

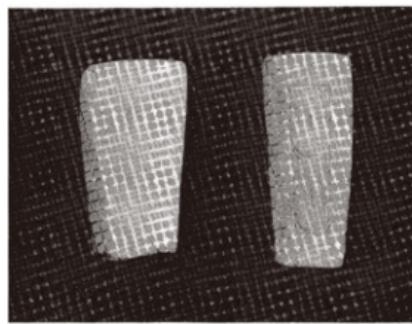


ヤナギダ古窯跡採集土器(裏)

図版22



本川遺跡採集遺物



喜念貝塚採集遺物

付編

ヨヲキ洞穴出土の動物骨について

鹿児島大学農学部 松 元 光 春

ヨヲキ洞穴出土の動物骨

鹿児島大学農学部 松元光春

1. はじめに

鹿児島県大島郡伊仙町（徳之島）にあるヨヲキ洞穴の発掘調査が、伊仙町教育委員会の主催で、鹿児島県文化課の牛之浜氏らの指導の下に行なわれた。今回、この洞穴より出土した動物骨について調査する機会を得たので、ここにその結果の概要を報告する。

2. 出土動物種と出土骨量

今回調査した自然遺物の総重量は1,397.7gで、それらの動物別および区画別出土骨量は表1に示した。貝類を除くと、哺乳類が全体の93.6%を占めている。哺乳類のうち、動物種と骨の種類を同定出来たものは1,068.1g、368骨片で、動物種は以下の4目5種である。

A. 偶蹄目 Aritiodactyla

- 1) イノシシ *Sus Scrofa*
- 2) ウシ *Bos Taurus*

B. 奇蹄目 Perissodactyla

- 3) ウマ *Equus caballus*

C. 兎目 Lagomorpha

- 4) アマミノクロウサギ *Pentalagus fernessi*

D. 齧歯目 Rodentia

- 5) ネズミ類 *Rattus sp*

これらのうち、イノシシが676.1g（318骨片）で、哺乳類全体の63.3%を占めている。以下各動物について述べるが、哺乳類の骨格別および動物別出土骨片数は表2に示した。

1) イノシシ（図版Iの1—38参照）

イノシシの骨は318個みられ、頭蓋を除くと、上腕骨（左7、右7、以下同じ）、胫骨（3、6）が多い。頭蓋は細かく割断されているので、骨片数ならびに歯の数が多くなっている。歯を歯種別に分類すると表3のようになる。この表では、比較的単純な歯槽のために抜けやすい第一、二切歯が多い点と、その中に含まれている乳歯の数が多いという点が注目されよう。この歯の数から推定した個体数は8体以上である。骨の形状は現在のリュウキュウイノシシに類似している。乳歯の数からもわかるように幼若齢個体が多くみられ、また、胎仔あるいは新生仔のものと推定

される小骨片もみられる。前述したように頭蓋や長骨は割断されており、一部には焼かれている骨もみられるが、加工痕のある骨片はみられない。

2) ウシ (図版IIの1-7参照)

ウシの骨は27個みられ、保存のよい中手骨の遠位端幅×径で 56.1×30.1 mm、第四指基節骨長で58.5mm、第四趾中節骨長で39.0mmとなり、これは現代黒毛和牛の雌よりも小さく、日本在来牛の一つである口之島野生牛の雌とほぼ同じである。なお、一部の骨に切傷痕がみられる。

3) ウマ (図版IIの8-9参照)

ウマは肋骨片が6個みられているにすぎないので、年齢推定が困難であるが、これらの骨が成獣のものであると仮定すれば、在来馬の一つであるトカラ馬と同じ大きさの小型種といえよう。

4) アマミノクロウサギ (図版IIの10-17参照)

アマミノクロウサギは歯、大腿骨など11個がみられ、2個体以上と推定される。骨の形状は現生のものとほぼ変わらない。

5) ネズミ (図版IIの18-20参照)

ネズミは歯、大腿骨など6個がみられ、2個体以上と推定される。大きさはドブネズミと同程度あるいはこれよりやや小さい。

以上、哺乳類の骨について述べたが、区画別にみると(表1)、C-8区が最も多く、また、骨格別では(表2)、頭蓋が50%をも占めている。

鳥類の骨(図版IIの21-23参照)は、下頸骨、鳥口骨、中手骨など6個みられるが種の同定は出来なかった。

爬虫類(図版IIの27-28参照)はウミガメで、腹甲の骨片である。

両生類(図版IIの24-26参照)はカエルで、椎骨や肢骨がみられる。

甲殻類(図版IIの29-30参照)は、種の同定は出来ないが、カニの鉗脚のみで、焼けているのもみられる。

魚類(図版IIの31-36参照)は、ブダイ、サメなどで、前上顎骨、椎骨、鰓条が多くみられる。椎骨には種名は不明であるが小型種のものがかなり含まれており、詳細な同定は専門家に委ねたい。

3. 考 察

伊仙町には、面繩貝塚、犬田布貝塚という大遺跡があり、ここからも多数の動物骨が出土している。哺乳類としては、前者から3目4種⁽¹⁾、後者から5目6種⁽²⁾の動物が報告されており、今回の調査分を加えると6目8種、即ち、イノシシ、シカ、ウシ、ウマ、イヌ、アマミノクロウサギ、ネズミ、クジラ類が確認されたことになる。

動物別にみると、イノシシは最も多く、しかも小型種である点は、この地方に共通した特徴となっている。ウシ、ウマはともに在来種に匹敵する小型種であったが、当時のものであったかどうかについては慎重に対処しなければならないだろう。クロウサギは犬田布貝塚に次いでわが国では二番目の出土例となるが、動物性蛋白源としてはイノシシに次ぐ大きさでもあり、この地方の遺跡から今後次々に発見される可能性は高いだろう。

ヨヲキ洞穴出土の哺乳動物相は、沖永良部島の中甫洞穴のものと非常に類似してその種類が貧相であり、県本土の洞穴遺跡とは際立った対照をみせている。⁽³⁾

4.まとめ

ヨヲキ洞穴から出土した動物骨について同定を行なった。

- (1) 自然遺物の総重量は1,397.7gで、哺乳類1,277.8g、鳥類2.2g、爬虫類（ウミガメ）54.1g、両生類（カエル）1.5g、魚類48.9g、甲殻類（カニ）13.2g、貝類33.1gであった。
- (2) 哺乳類はイノシシ、ウシ、ウマ、アマミノクロウサギ、ネズミで、イノシシが大部分を占めている。

参考文献

1. 西中川駿：面繩貝塚出土の動物骨について、伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書
(1) P43—50 (1983)
2. 同上他：古代遺跡出土の動物骨に関する研究
IV. 鹿児島県黒川洞穴出土骨の概要、鹿大農學報告、33
P147—157 (1983)
3. 同上他：中甫洞穴出土の動物骨、鹿児島考古、17 P41—44 (1983)
4. 同上：犬田布貝塚出土の動物骨について、伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(2) P74—81 (1984)

図版の説明

図版 I 1—38：イノシシ

1. 上顎骨（左，雄） 2. 上顎骨（左，雌） 3. 上顎骨（左，幼獣）
4. 下顎骨（右） 5. 下顎骨（右） 6. 上顎第一切歯（右） 7. 上顎第一乳切歯（右） 8. 上顎犬歯（左，雄） 9. 上顎犬歯（左，雌）
10. 下顎第一切歯（右） 11. 下顎第一切歯（左） 12. 下顎第一乳切歯（左） 13. 下顎犬歯（右，雌） 14. 下顎犬歯（左，雌） 15. 下顎犬歯（右，雄） 16. 下顎犬歯（右，雌） 17. 下顎第三後臼歯（右） 18.
- 胸椎 19. 胸椎 20. 第三肋骨（右） 21. 第三肋骨（右） 22. 第五肋骨（右） 23. 肩甲骨（右） 24. 上腕骨（右） 25. 捻骨（右） 26.
- 尺骨（左） 27. 尺骨（左） 28. 第三中手骨（右） 29. 第二中手骨（左） 30. 第三指中節骨（左） 31. 大腿骨（左） 32. 大腿骨（左）
33. 胫骨（右） 34. 胫骨（左） 35. 腓骨（左） 36. 距骨（左） 37.
- . 中心足根骨（左） 38. 第五趾基節骨（左）

図版 II 1—7：ウシ

8—9：ウマ

10—17：アマミノクロウサギ

18—20：ネズミ

21—23：鳥類（23：ヒヨドリ）

24—26：カエル

27—28：ウミガメ

29—30：カニ

31—36：魚類（31：ブダイ，34：サメ）

1. 下顎骨（左） 2. 下顎第一切歯（左） 3. 下顎第二後臼歯（右） 4.
- 第四肋骨（左） 5. 中手骨（左） 6. 第四指基節骨（右） 7. 第三趾中節骨（左） 8. 第九肋骨（左） 9. 第十一肋骨（左） 10. 下顎第一切歯（左）
11. 下顎第一後臼歯（左） 12. 下顎第二後臼歯（左） 13. 肩甲骨（左） 14.
- 大腿骨（左） 15. 第二中手骨（左） 16. 第三趾基節骨（左） 17. 第五指末節骨（左） 18. 下顎第一切歯（右） 19. 大腿骨（左） 20. 第一中足骨（左）
21. 下顎骨（左） 22. 烏口骨（右） 23. 烏口骨（右） 24. 上腕骨（右） 25.
- 前腕骨（右） 26. 跖骨（左） 27. 腹甲 28. 腹甲 29. 鉗脚 30. 鉗脚
31. 前上顎骨（左） 32. 椎骨 33. 椎骨 34. 椎骨 35. 鰭条 36. 鰭条

表1 動物別および区画別出工骨量

(単位:g)

動物 区画	哺 乳 類			鳥 鳥			魚 甲			貝 不			区画 別 量
	イ ノ シ	ウ マ シ	ウ ク シ	ア ク マ	ネ ズ ミ	ウ ズ ミ	カ ガ メ	カ ガ ル	カ エ ル	カ エ ル	カ エ ル	カ エ ル	
B—4.5 (縄文)	1.3 (1)	117.1 (8)											118.1
C—2 (縄文～奈良)	16.4 (5)	47.4 (5)										15.0	78.9
C—8 (縄文)	405.4 (224)	19.5 (2)	6.6 (11)	0.7 (5)	1.5 (5)	51.9 (8)	1.5 (13)	48.0 (260)	11.5 (33)	33.1 (33)	157.4 (704.6)		
C—11 (弥生)	233.8 (69)	23.9 (2)		0.9 (1)	0.7 (1)	2.2 (1)			0.9 (3)		12.3 (274.7)		
K—4 (平安～鎌倉)	19.2 (3)	132.3 (10)	43.6 (6)							1.7 (2)	25.0 (221.8)		
動物別 出土骨量	676.1 (318)	340.2 (27)	43.6 (6)	6.6 (11)	1.6 (6)	2.2 (6)	54.1 (9)	1.5 (13)	48.9 (263)	13.2 (35)	33.1 (35)	209.7 (1397.7)	

() 内の数字は骨片数を示す

表2 哺乳類の骨格別出土骨片数

動物種	骨名	頭蓋		胴骨		前肢骨		後肢骨		動物骨 別片 出数	
		頭下 蓋 顎 齒 骨 骨	頸 胸 腰 仙 尾 肋 胸 椎 椎 椎 椎 骨 骨	肩 上 挑 尺 手 中 指 甲 腕 骨 骨 骨 骨 骨 骨	手 中 指 根 手 骨 骨 骨 骨 骨 骨	腕 根 手 骨 骨 骨 骨 骨 骨	大 膝 脛 蹠 足 中 趾 根 足 骨 骨 骨 骨 骨 骨	小 膝 脛 蹠 足 中 趾 根 足 骨 骨 骨 骨 骨 骨	大 膝 脛 蹠 足 中 趾 根 足 骨 骨 骨 骨 骨 骨	小 膝 脛 蹠 足 中 趾 根 足 骨 骨 骨 骨 骨 骨	
イノシシ	左 右	34 4 27 13	20 38 13 37	33 25 1	2 7 2 38	2 1 2 2 1	1 1 2 1	4 1 2 6 2	3 1 1 2 1	4 2 1 1 1	318
ウシ	左 右	1 1	2 1	7		1 1 2 1	1 1 1	3 1 1	1 1 1	1 4	27
ウマ	左 右			5 1							6
アマミノ クロウサギ	左 右	5			1	1 1	1 1	1 1	1 1	1 1	11
ネズミ	左 右		2					1 1	1 1	1 1	6
骨格別出 出土骨片数		184 (50.0%)		92 (25.0%)		40 (10.9%)		52 (14.1%)		368	

表3 イノシシの歯種別歯数

		第一 切 歯	第二 切 歯	第三 切 歯	犬 歯	第一 前 白 歯	第二 前 白 歯	第三 前 白 歯	第四 前 白 歯	第一 後 白 歯	第二 後 白 歯	第三 後 白 歯	計
上 顎	左	3 (2)	4 (4)		3		2 (1)	3 (2)					15 (9)
	右	6 (3)	1 (1)		2			2 (1)	2 (1)	1			14 (5)
下 顎	左	5 (3)	8 (6)		4		1 (1)	1 (1)	1 (1)	1	1	1	23 (12)
	右	10 (5)	3 (1)	2	5		1 (1)			1	1		23 (7)
計		24 (13)	16 (12)	2	14		2 (2)	3 (2)	6 (4)	4	2	2	75 (33)

() 内の数字は乳歯数を示す

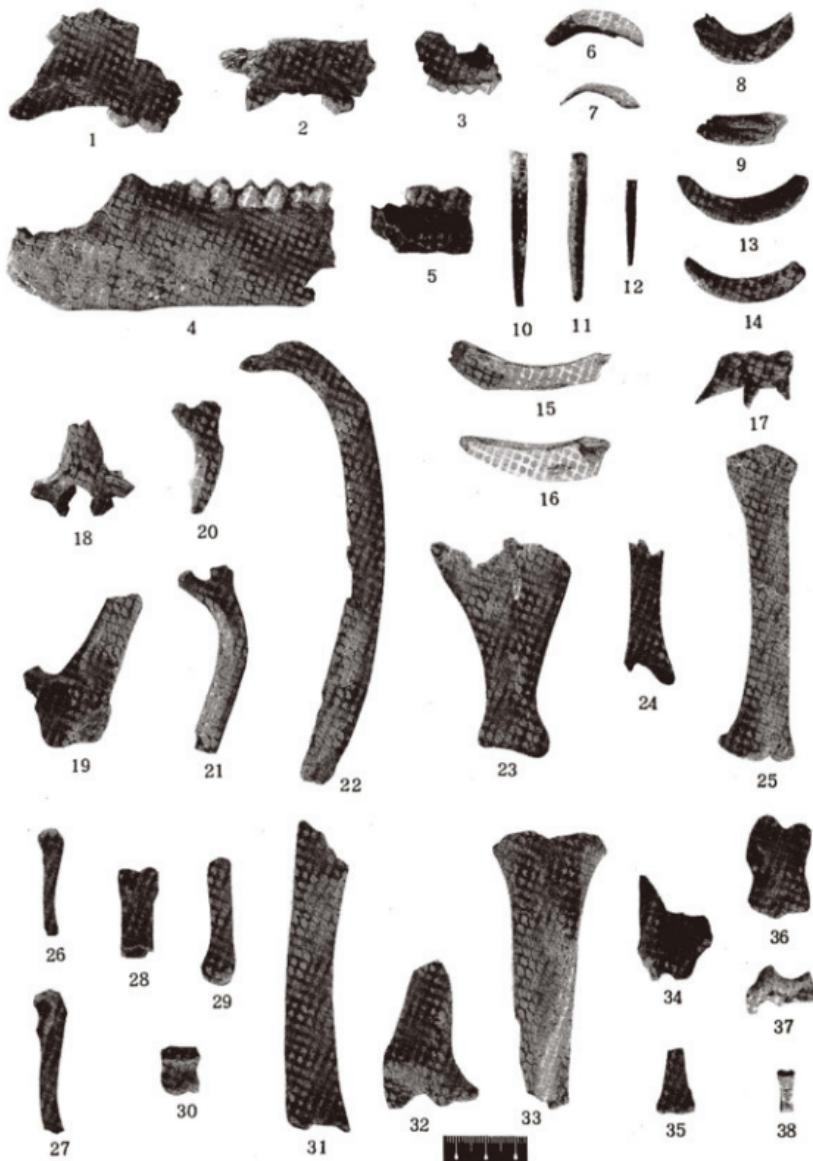


圖 版 I



圖 版 II

あとがき

伊仙町では昭和57年より毎年調査が行われ、地元の人々の文化財に対する理解と熱意は調査中にもひしひしと感じることが出来た。

今回は、昨年調査が行われた南西諸島初の窯跡周辺の洞穴調査ということで注目をあげていた。梅雨空の中、調査は発電機の音と、時折聞こえる「出た！」という作業員の声、急ぎライトを照らすと古代の生活跡が目の前に浮かび、皆の目が光っていたことを想い出す。梅雨の風雨にも負けなかった調査であったが、収蔵庫で折角出来上った図面等を台風13号によってぬらしてしまった。

最後に、骨折りをしてもらった伊仙町教育委員会、地元の人々、そして二度手間をとらしてしまった収蔵庫の皆さんに感謝申し上げたい。

発掘作業員 嶺山哲博、嶺山純二、前田吾伸、牧島世造、嶺山八重子

嶺山エイ、前田谷、政岡恵美子、益トヨ子

整理作業員 岩元里恵子、喜入かつえ、相良正子、下畠節子

中原巳美子、岩坪千枝子



調査参加者

伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)

三ノキ洞穴

1986年3月

発行 大島郡伊仙町教育委員会

鹿児島県大島郡伊仙町伊仙1840番地

印刷 吉川印刷

大島郡徳之島町亀津7533番地